

生活の中に演劇を

—演劇を楽しむ未来計画 3—



オペラシアターこんにゃく座 オペラ「あん」 撮影：前澤秀登



こまつ座「父と暮せば」——沖縄特別公演（朗読）



無名塾「幽霊」 撮影：中野久明



オペラシアターこんにゃく座 オペラ「ルドルフとイッパイアッテナ」 撮影：前澤秀登



青年劇場「星をかすめる風」 撮影：村井夕

生活の中に演劇をー演劇を楽しむ未来計画3ー

限られた大都市や演劇鑑賞組織が充実した都市以外で継続的に演劇を鑑賞・創造することは容易ではなく、芸術体験の地域間格差が拡大しています。日本劇団協議会は、この課題を解決するため、2023年度から四国と沖縄県の2つのエリアで、2024年度からは能登半島地震などの災害に見舞われた石川県能登半島地域も加えて、重点的に演劇の魅力・有効性を発信し、各地域の芸術体験機会の充実に貢献することを目的として、この事業をスタートしました。

演劇でつながる。演劇をつなぐ。——これは日本劇団協議会が大切にしている思いですが、一朝一夕に進んでいくものではありません。また、ひとりの力、一劇団の努力でかなうものでもありません。同じ思いで協働してくださる各地のみなさま方、行政、教育機関、そして劇団の方々の力で、土地を耕すように時間をかけて、種をまき、未来の収穫のときまで、腰をすえて育んでいく必要があります。

2025年度を中心に、3年間にわたる「生活の中に演劇をー新しい活動拠点形成事業ー」をふりかえり、その実績と成果、これからの課題を読者のみなさまと共有するためにこの報告書を発行しました。まだ道の途中ですが、各地域の演劇を求める、演劇が好きな、そして初めて演劇と出会った、たくさんの方々との協働の記録をご高覧ください。

公益社団法人日本劇団協議会

目次

「生活の中に演劇を」この事業が目指すこと……………2

》実施実績《

2023年度事業実績……………4

2024年度事業実績……………4

2025年度事業実績と3年間の実施地域MAP……………6

》2025年度の活動 四国《

オペラシアターこんにゃく座 オペラ『あん』……………8

オペラシアターこんにゃく座 オペラ『ルドルフとイッパイアッテナ』……………10

ワークショップ……………12

》2025年度の活動 沖縄県《

秋田雨雀・土方与志記念青年劇場『星をかすめる風』……………18

こまつ座『父と暮せば』——沖縄特別公演（朗読）……………20

》2025年度の活動 石川県《

無名塾『幽霊』……………22

》ふりかえり《

2025年度「生活の中に演劇を」アンケートからわかること……………24

この3年間で共に取り組んでくださった方々の証言……………28

「生活の中に演劇を」3年間の取り組みで作られたこと……………32

生活の中に演劇をー演劇を楽しむ未来計画3ー

この事業が目指すこと

公益社団法人日本劇団協議会は、文化庁の助成を受けて、2023年度から3年間にわたり、「生活の中に演劇をー新しい活動拠点形成事業ー」を、四国4県、沖縄県、石川県（2024年度から）で、以下の目的をもって継続してきました。

広がる芸術体験の格差

日本劇団協議会は、加盟する50の劇団・団体とともに、全国各地で公演を行い、演劇の魅力と感動を広く届けてきました。しかし、大都市圏とそれ以外の地域では、人々が演劇の魅力に触れる体験機会に大きな格差があります。

そして、2020年からのコロナ禍により、

全国的に体験機会は激減しましたが、地域間格差もますます広がっています。

例えば東京都と徳島県を比べると、

演劇・舞踊・演芸を生で鑑賞した人の割合が、

コロナ禍前の2016年は

徳島県は東京都の1/2弱だったのが、

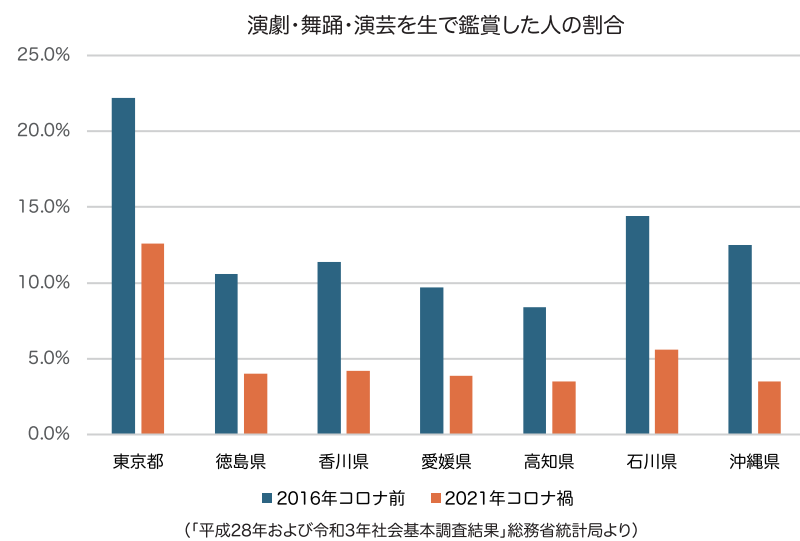
コロナ禍の2021年は1/3以下になり、

その格差が大きく広がっています。

コロナ禍を過ぎて、現在、日本全体

では生の舞台芸術の上演機会は戻り

つつありますが、都市部の大型公演にかたよっていると予想されています。



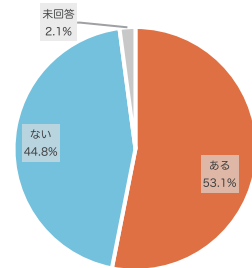
演劇体験格差解消のニーズ

2024年度、「生活の中に演劇を」事業のうち、四国・沖縄公演で観劇してくださった方々へのアンケートによると、「演劇・ミュージカルなどの公演を、あなたの生活圏内で鑑賞する機会がありますか」という問いに対して「ある」と答えたのは53.1%でした。半数近くの方々にとっては鑑賞する機会がない、ということです。また、このアンケートは、

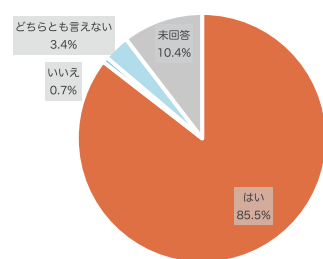
実際に「生活の中に演劇を」事業で劇場へ来てくださった方々への調査ですから、そうでない方も含めると、地域における鑑賞の機会は、もっと少ないと感じている人が多いのではないかと予測できます。

それでも85.4%の人が「今後も演劇・ミュージカルなどの公演を鑑賞したいと思いますか」という問いに対して「はい」と答えています。鑑賞機会が少ない地域へも、生の演劇・ミュージカルを届けてほしいという大きなニーズがあるということがわかります。

演劇・ミュージカルなどの公演を、あなたの生活圏内で鑑賞する機会がありますか？



今後も演劇・ミュージカルなどの公演を鑑賞したいと思いますか？



（「2024年度生活の中に演劇を 沖縄・四国公演 観劇アンケート」より）

演劇を地域課題解決のために

首都圏と地域の間では、演劇体験機会で大きな格差がありますが、それ以外にも、各地域では、地域ならではの課題を抱えています。

「生活の中に演劇を」では、各地域の課題解決にむけて、演劇の力を活用できないかと考え、それぞれの地域で取り組んでいく課題を以下のとおり設定しました。

》四国：拠点と拠点、人と人をつなぐ《

四国の4県は地理的・地形的に距離があり、演劇事業において連携した取り組みが難しい面があります。だからこそ、鑑賞の機会が限られている各県や拠点を、人と人、拠点と拠点のつながりによって結び、演劇を体験できる環境や機会をより豊かにしていきたいと考えています。

また今年度は、人と人、人と地域社会をつなぐ、という目的から、愛媛県、高知県でコミュニケーション・ワークショップを試験的に実施しました。



コミュニケーション・ワークショップ(愛媛県立三崎高等学校)

》沖縄：戦争証言を語り継ぎ、平和教育につなげる《

島しょ部を含む沖縄県内各地で、戦争を題材にした演劇公演や関連イベント、ワークショップを実施し、戦争体験の証言を次世代へ語り継ぐことで、平和の大切さを伝え、ともに学ぶ場を広げていきたいと考えています。



青年劇場『星をかすめる風』 撮影：宿谷誠

》石川：被災地に寄り添おう《

石川県能登地方では、2024年1月の能登半島地震をはじめとした災害により、演劇を通じて人と人が感動を分かち合う機会が限られています。

この事業を通じて、被災地の方々に寄り添い、演劇による交流と支え合いの場を育んでいきたいと考えています。



無名塾『幽霊』 撮影：中野久明

地域と協働するための拠点を育てる

日本劇団協議会は、全国レベルの劇団の統括団体として、各地の拠点やキーパーソンとつながり、互いに学び合いながら成長していきたいと考えています。そうしたつながりを通じて、全国どこでも継続的に演劇を楽しめる環境を、皆さんとともにつくりていきたいと考えています。

生活の中に演劇を 2023年度事業実績

地域	開催地	区分	日時	内容	会場	参加者数
四国	愛媛県 八幡浜市	公演	5月13日(土)14:00	素劇『樫山節考』 原作：深沢幸雄 構成・演出：関谷幸雄 出演：柴田義之、藤川一歩、山本隆世、上野裕子ほか 制作：劇団1980	八幡浜市文化会館 ゆめみかん	222名
		ワークショップ	5月12日(金)	「素劇」体験ワークショップ 黒い箱と白いひもを使って「みんなでつくる」 楽しさを味わおう！ 進行役：柴田義之・山本隆世・木之村達也・戸谷昌弘・ 上野裕子・関根麻帆（劇団1980）、 後藤まさる（ミュージシャン）	愛媛県立三崎高等学校	3年生 41名
	愛媛県 新居浜市	公演	11月28日(火)18:30 11月29日(水) 12:30/16:00	『アカシアの雨が降る時』 作・演出：鴻上尚史 出演：竹下景子、鈴木福、松村武 制作：サードステージ		642名
		ワークショップ	11月30日(木)	『鴻上尚史演劇ワークショップ』 進行役：鴻上尚史	あかがねミュージアム 多目的ホール	一般 30名
		講演会	11月30日(木)	『コミュニケーションのヒント』 講師：鴻上尚史		220名
	徳島県 藍住町	ワークショップ	9月18日(月祝)	『三世代交流smileワークショップ』 進行役：中村茂昭(坊っちゃん劇場)、 高橋真冬(UZU ARTS)	藍住町総合文化ホール 交流室2	一般 9名
沖縄	沖縄県 那覇市	公演	6月30日(金)19:00、 7月1日(土)・ 2日(日)14:00	津嘉山正種ひとり語り『命口説』 原作：謝名元慶福 構成台本・演出：津嘉山正種 制作：劇団青年座	タイムスホール	846名
	沖縄県 宮古島市	公演	12月14日(木)19:00 12月16日(土)15:00	津嘉山正種ひとり語り 『沖縄の魂ー瀬長亀次郎物語』 原作：謝名元慶福 構成台本：津嘉山正種 演出：菊地一浩 『命口説』 制作：劇団青年座	宮古島市未来創造 センター 多目的ホール	227名
		ワークショップ	11月18日(土)	『演劇を使った平和を考えるワークショップ』 進行役：安藤瞳・小暮智美・嶋田翔平（青年座）、 蔵元利貴・比嘉恭平・与那嶺圭一 （TEAM SPOT JUMBLE）	宮古島市未来創造セン ター多目的ホール	37名
	沖縄県 名護市	公演	12月24日(日)15:00	津嘉山正種ひとり語り 『沖縄の魂ー瀬長亀次郎物語』 制作：劇団青年座	名護市民会館中ホール	209名
		ワークショップ	11月20日(月) 12月23日(土)	『演劇を使った平和を考えるワークショップ』 進行役：安藤瞳・小暮智美・嶋田翔平（青年座）、 蔵元利貴・比嘉恭平・与那嶺圭一 （TEAM SPOT JUMBLE）	名桜大学 名護中央公民館	19名 6名

生活の中に演劇を 2024年度事業実績

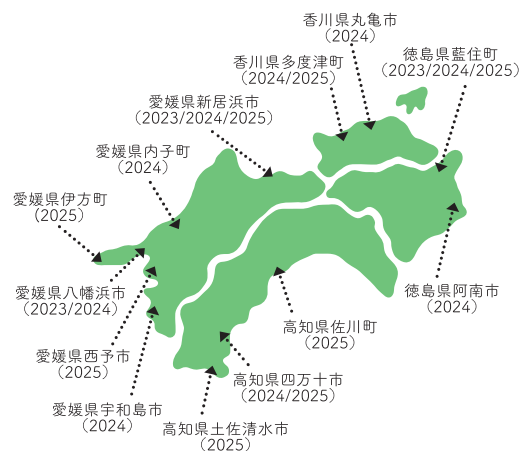
地域	開催地	区分	日時	内容	会場	参加者数
四国	愛媛県 内子町	ワークショップ	8月20日(火)	『四国をつなぐ演劇ワークショップ』 進行役：中村茂昭・土井直美（坊っちゃん劇場）	内子座	3名＋ 見学者1名
	愛媛県 宇和島市	ワークショップ	9月27日(金)	『ココロをひらくワークショップ』 進行役：中村茂昭・土井直美（坊っちゃん劇場）	南予文化会館	15名＋ 見学者1名
	愛媛県 八幡浜市	公演	10月28日(月) 18:30	『おれたちは天使じゃない』 脚本：矢代静一 脚本・作詞：藤田敏雄 作詞：山川啓介 音楽：いずみたく 演出：金澤菜乃英(青年座) 出演：横堀悦夫(青年座)、金子由之(昂)、米山実(文化座)、吉田雄、 大川永、刀根友香、半澤昇 他 制作：ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ		246名
		ワークショップ	10月27日(日)	『遊んで、遊んで、そして遊んで発見！』 （小学生～高校生対象） 進行役：鈴木彩子・明羽美姫 （ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ）	八幡浜市文化会館 ゆめみかん	15名
		ワークショップ	10月27日(日)	『自分の好きなものを活かして』（高校生以上対象） 進行役：鈴木彩子・明羽美姫 （ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ）		12名

地域	開催地	区分	日時	内容	会場	参加者数
四国	愛媛県 新居浜市	ワークショップ	11月27日(水)	『鴻上尚史ワークショップ』 より良いコミュニケーションの取り方を教えます』 進行役：鴻上尚史	あかがね ミュージアム	28名＋ 見学者2名
		講演会	11月28日(木)	『君はどう生きるか』 講師：鴻上尚史	新居浜市立中萩 中学校体育館	450名＋ 見学者 50名
	徳島県 阿南市	ワークショップ	9月7日(土)	『四国をつなぐ演劇ワークショップ』 進行役：中村茂昭・土井直美（坊っちゃん劇場）、 高橋真冬（UZU ARTS）	阿南市文化会館夢 ホール	17名＋ 見学者6名
	徳島県 藍住町	ワークショップ	9月8日(日)	『四国をつなぐ演劇ワークショップ』 進行役：中村茂昭・土井直美（坊っちゃん劇場）、 和田一詩・高橋真冬（UZU ARTS）	藍住町 総合文化ホール	8名
	香川県 丸亀市	トーク＆ライブ	9月29日(日)	『いずみたくとミュージカル』 講師・出演：大川永・土屋友紀子 （ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ）	丸亀市民交流 センター マルタス	44名
	香川県 多度津町	公演	11月24日(日) 13:30	『おれたちは天使じゃない』 制作：ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ		128名
		ワークショップ	10月26日(土)	『ココロをひらくワークショップ』 進行役：中村茂昭・土井直美（坊っちゃん劇場）、 明羽美姫(ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ)	多度津町民会館 サクラートたどつ	9名＋ 見学者2名
	高知県 四万十市	公演	10月29日(火) 18:30	『おれたちは天使じゃない』 制作：ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ		401名
		ワークショップ	9月28日(土)	『ココロをひらくワークショップ』 進行役：中村茂昭・土井直美（坊っちゃん劇場）、 大川永(ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ)	四万十市 総合文化センター しまんとびあ	22名
		トーク＆ライブ	9月28日(土)	『いずみたくとミュージカル』 講師・出演：大川永・土屋友紀子 （ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ）		29名
沖縄	沖縄県 名護市	ワークショップ	10月5日(土)	『演劇を使ったコミュニケーション・ワークショップ』 進行役：与那覇圭一・比嘉恭平・蔵元利貴 （TEAM SPOT JUMBLE）	名護中央公民館	14名
	沖縄県 うるま市	公演	12月8日(日) 14:00	『しゃぼん玉』 原作：乃南アサ『しゃぼん玉』（新潮文庫刊） 脚本：斉藤祐一 演出：西川信廣 出演：佐々木愛・藤原章寛・津田二朗 他 制作：文化座	きむたかホール 大ホール	365名
		ワークショップ	10月9日(水)	『演劇を使ったコミュニケーション・ワークショップ』 進行役：与那覇圭一・比嘉恭平・蔵元利貴 （TEAM SPOT JUMBLE）	石川地区公民館	13名＋ 見学者1名
	沖縄県 那覇市	公演	12月5日(木) 18:30 6日(金)14:00	『しゃぼん玉』 制作：文化座	那覇文化芸術劇場 なはーと 小劇場	203名
		ワークショップ	10月12日(土)	『演劇を使った平和を考えるワークショップ』 進行役：与那覇圭一・比嘉恭平・蔵元利貴 （TEAM SPOT JUMBLE）	対馬丸記念館	15名＋ 見学者8名
	沖縄県 石垣市	上映会&トーク ショー	11月9日(土)	『佐々木愛とともに、映画『沖縄』を観る！舞台を語る！』 講師：佐々木愛、三上智恵(映画監督)	沖縄県男女共同 参画センター・ ているるホール	70名
		公演	11月13日(水) 14:10 14日(木)14:15 16日(土)14:00	『あの夏の絵』作・演出：福山啓子 出演：藤井美恵子、広戸聡、永田江里 他 制作：秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場 11/13・14は中学生団体鑑賞、16は一般公演	石垣市民会館 大ホール	1,222名
		ワークショップ	10月19日(土)・ 20日(日)	『プロの俳優による『伝える』ための演劇ワークショップ』 進行役：佐藤尚子・白木匡子・小切伊知子・中谷源（青年劇場）	結い心センター	11名＋ 見学者1名
石川	沖縄県 宮古島市	ワークショップ	10月27日(日)	『表現ってなんだろう？演劇ワークショップ』 進行役：与那覇圭一・比嘉恭平・蔵元利貴 （TEAM SPOT JUMBLE）	宮古島市公民館	36名＋ 現学者4名
	沖縄県 沖縄市	上映会& トークショー	11月10日(日)	『佐々木愛とともに、映画『沖縄』を観る！舞台を語る！』 講師：佐々木愛 聞き手：宮島貴一(Vacant Store Pictures)	シアタードーナツ	70名
	石川県 能登町	公演	6月4日(火)	『行きたい場所をどうぞ』 作：瀬戸山美咲 演出：大谷賢治郎 出演：奥原義之・船津基・武智香織 他 制作：青年劇場	石川県立能登高等 学校体育館	269名

生活の中に演劇を 2025年度事業実績

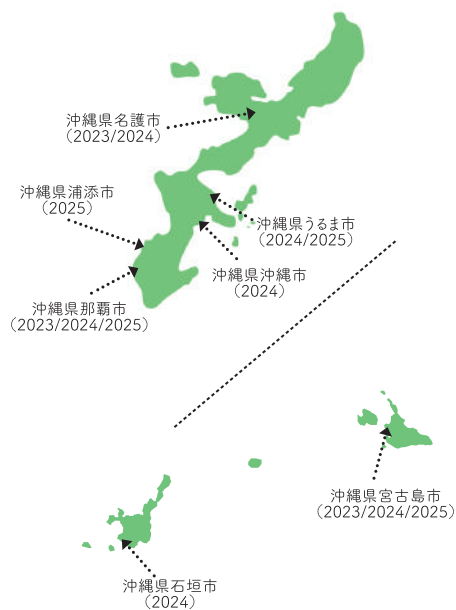
<公演とプレイベント>

四国 拠点と拠点、人と人をつなぐ



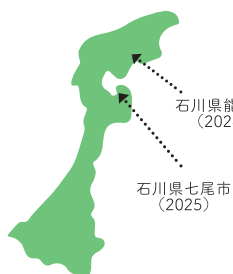
作品名		オペラ『あん』		本文8～9ページ	
制作団体		オペラシアターこんにゃく座			
公演			プレイベント		
愛媛県西予市		5月18日	4月20日	原作・台本のドリアン助川氏講演会＋ こんにゃく座歌役者とピアニストによる ミニコンサート	
愛媛県新居浜市		5月21日	4月11日		
香川県宇多津町		5月22日	4月19日 (坂出市)		
作品名		オペラ『ルドルフとイッパイアッテナ』		本文10～11ページ	
制作団体		オペラシアターこんにゃく座			
公演			プレイベント		
高知県佐川町		7月26日	5月25日	歌とオペラとこんにゃく体操の ワークショップ	
徳島県藍住町		7月27日	5月24日		
高知県四万十市		7月29日	5月20日		

沖縄 戦争証言を語り継ぎ、平和教育につなげる



作品名		『星をかすめる風』		本文18～19ページ	
制作団体		秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場			
公演			プレイベント		
沖縄県うるま市	11月16日	8月30日	トークイベント 【戦争と個人と文化ー朝鮮半島から来た 詩人・尹東柱を通して考える】		
		10月18日	おとなのための演劇ワークショップ		
沖縄県浦添市	11月18日	8月29日	おとなのための演劇ワークショップ		
		8月31日 (那覇市)	トークイベント 【星をかすめたのは誰かー韓国国民的 詩人・尹東柱とアジア・沖縄】		
作品名		『父と暮せば』——沖縄特別公演（朗読）		本文20～21ページ	
制作団体		こまつ座			
公演			プレイベント		
沖縄県那覇市	11月19日	10月25日	トークイベント『父と暮せば』 作品について		
沖縄県宮古島市	11月20日～ 21日	10月26日			
		10月26日	ワークショップ		

石川 被災地に寄り添おう



作品名 『幽霊』 本文22～23ページ			
制作団体 無名塾			
公演		プレイベント	
石川県七尾市	10月10日～ 15日	9月27日	能登演劇堂開館30周年・ 無名塾交流40周年アニバーサリー トークショー

<ワークショップなど>

四国 拠点と拠点、人と人をつなぐ

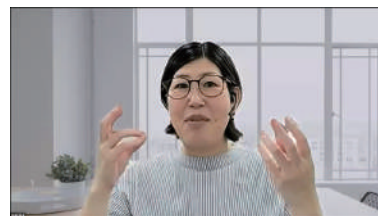
演劇ワークショップには、参加者が協力してゲームや表現を体験することで、人と人をつなぐ力があります。
今年度、四国ではコミュニケーションをテーマにしたワークショップや講演会を実施しました。

事業名		コミュニケーション・ワークショップ		本文12～15ページ	
開催地・会場		日程		進行役	
愛媛県伊方町		10月2日		西川信廣・高橋正徳(文学座)、小林七緒(流山児★事務所)	
愛媛県立三崎高等学校					
愛媛県西予市		10月3日		西川信廣・高橋正徳(文学座)、小林七緒(流山児★事務所)	
愛媛県立宇和高等学校					
高知県四万十市		11月10日		西川信廣・加納朋之・音道あいり（文学座）	
高知県立中村中学高等学校					
高知県土佐清水市		11月11日		西川信廣・加納朋之・音道あいり（文学座）	
高知県立清水高等学校					
事業名		鴻上尚史演劇ワークショップ		本文16～17ページ	
開催地・会場		日程		進行役	
愛媛県新居浜市		10月23日		鴻上尚史（サードステージ）	
あかがねミュージアム					
事業名		講演会『君はどう生きるか』		本文16～17ページ	
開催地・会場		日程		講師	
愛媛県新居浜市		10月24日		鴻上尚史（サードステージ）	
新居浜市立大生院中学校					

ハラスメント防止研修を実施しました

日時:2025年4月26日 13～15時
方法:オンライン
講師:合同会社syuz'gen 植松侑子（上級ハラスメント対策アドバイザー）
参加者:21名

「生活の中に演劇を」事業では、市民のみなさまに演劇に興味をもっていただくため、歌や演技をとり
いれたワークショップを行っています。日本劇団協議会は事業開始前に、ワークショップ講師やコーディネーターを対象とした「ハラスメント防止研修」を実施。ハラスメントの定義、どのようなことがハラスメントにあたるのか、ハラスメントを防ぐために他者を尊重すること、安心安全な場をつくるための心構えを具体的に学びました。研修後、講師と参加者でディスカッションする時間を設け、知識のアップデートの重要性を再認識しました。



植松侑子さん

オペラシアターこんにゃく座

オペラ「あん」

原作・台本：ドリアン助川（ポプラ社刊「あん」より）
 作曲：寺嶋陸也 演出：上村聡史
 美術：乗峯雅寛 衣裳：半田悦子
 照明：阪口美和 音楽監督：萩京子
 舞台監督：大垣敏朗
 出演／島田大翼、梅村博美、熊谷みさと、豊島理恵、
 相原智枝、沖まどか、小田藍乃、泉篤史、
 橋川恵一（クラリネット）、入川舜（ピアノ）



オペラ「あん」 〈左から〉島田大翼、梅村博美、相原智枝



舞台写真撮影：前澤秀登 他

作品について

人には言えない過去を持ち、借金を返すためにどら焼き屋「どら春」の店長として働く千太郎。店で働きたいと訪ねてきた徳江の作る「餡（あん）」の美味しさに驚き、雇うことにするが、徳江がハンセン病患者だという噂が広まり…。千太郎と徳江はお互いの存在に影響を受けつつ、あらたな一歩を踏み出そうとする姿が描かれます。生きることの意味や、どんな厳しい環境にあって人も人と調和して生きていくことの大切さを投げかけます。研ぎ澄まされた声と楽器（ピアノ、クラリネット）のアンサンブルがとても美しい、心を打つオペラです。原作は世界中で翻訳され、2015年に樹木希林主演で映画化もされたドリアン助川氏の小説「あん」。原作者ドリアン助川氏自身の書き下ろしオペラ台本によって2022年に舞台化しました。



〈左から〉熊谷みさと、島田大翼、沖まどか、豊島理恵



プレイベント「オペラ『あん』講演会＋ミニコンサート」について

公演各地または近隣地域のみなさんに、公演内容を紹介するとともに、オペラを身近に感じていただくために、オペラ『あん』原作・台本のドリアン助川氏による講演会と、こんにゃく座歌役者・相原智枝、熊谷みさと、泉篤史とピアニスト・入川舜によるミニコンサートを行いました。



ドリアン助川氏による講演会とミニコンサート（香川県坂出市）



愛媛県西予市

<公演>

日程：5月18日（日） 15:00開演

会場：西予市宇和 문화會館 鑑賞者数：364名

協働団体・共催：南予で演劇を観る会

後援：愛媛県、愛媛県教育委員会、西予市、西予市教育委員会、西予市文化協会、愛媛新聞社、西予CATV、一般財団法人宇和文化会館

協力：Music café京、八幡浜ミュージカル劇団、NPO法人やわたはま銀座バスケット、ブティックアルファルファ、喫茶モンブラン、スペースゆう、Chez利太郎、マイタウン新居浜

<「オペラ『あん』講演会＋ミニコンサート」>

日程：4月20日（日） 14:00

会場：宇和米博物館 講堂

参加者数：100名

協働団体：南予で演劇を観る会、松山市民劇場



会場は、昭和3年建築の木造校舎を移築した宇和米博物館。ミニコンサートでは、大切に保存されてきた「100年ピアノ」で演奏させていただきました。

講演会の当日は、愛媛県立宇和高等学校の生徒による人権学習の発表「広がる・つながる人権の輪～ハンセン病回復者の人権問題を通して」も行われ、ドリアン助川氏との交流のひと時をもちました。

応援企画

西予市の隣、八幡浜市では、西予市での講演会＋ミニコンサートに先立って4月15日、西予市出身で11歳の時にハンセン病を患い、療養施設・大島青松園に入所していた詩人の塔和子さんの詩を聴くワークショップが開催されました。



愛媛県新居浜市

<公演>

日程：5月21日（水） 14:00／18:30開演

会場：あかがねミュージアム 多目的ホール

鑑賞者数：168名

共催：あかがねミュージアム運営グループ

後援：新居浜市、新居浜市教育委員会、愛媛県、愛媛県教育委員会、愛媛新聞社

協力：マイタウン新居浜、フリーペーパーHoo-Ja!、イオンモール新居浜店、新居浜テレコムプラザ店

<「オペラ『あん』講演会＋ミニコンサート」>

日程：4月11日（金） 18:00

会場：あかがねミュージアム 多目的ホール

参加者数：51名

協働団体・共催：あかがねミュージアム運営グループ

香川県宇多津町（公演）・香川県坂出市（プレイベント）

<公演>

日程：5月22日（木） 18:30開演

会場：ユーブラザうたづ ハーモニーホール

鑑賞者数：150名

協働団体：香川市民劇場

共催：丸亀市民劇場準備会・オペラ『あん』宇多津公演

実行委員会

後援：香川県、香川県教育委員会、宇多津町、宇多津町教育委員会、丸亀市、丸亀市教育委員会、坂出市

<「オペラ『あん』講演会＋ミニコンサート」>

日程：4月19日（土） 15:00

会場：坂出市民ホール

鑑賞者数：120名

協働団体：丸亀市民劇場準備会・オペラ『あん』

宇多津公演実行委員会、香川市民劇場

✨ オペラ「あん」のために協賛してくださったみなさま ✨ *thank you!*

NPO法人やわたはま銀座バスケット、八幡浜観光バス株式会社、JAひがしうわ、株式会社今井自動車・今井重機、えひめ未来農業協同組合、愛媛医療生活協同組合新居浜協立病院、愛媛医療生活協同組合生協宇摩診療所、株式会社東新建設、生活協同組合コープえひめ、松浦建設株式会社、株式会社山倉建設、株式会社監崎

鑑賞者のアンケート から

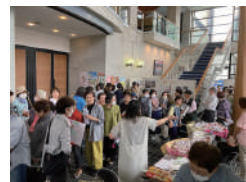
ぜひ多くの学生、特に小学生や中高生の皆さんにも観ていただきたい作品だと強く感じました。ハンセン病にまつわる歴史や偏見という重いテーマを扱いながらも、人と人とのつながりや、生きる力、再生の可能性といった、誰にとっても大切なメッセージが込められており、若い世代の心にも深く届く内容だと思います。（西予市公演）

ピアノの旋律と柔らかなクラリネットの音色に包まれながら、演者のみなさん一人ひとりの命の震えを感じ取り、かつてないほど心を揺さぶられました。（新居浜市公演）

オペラは数居が高かったのですが、こういうオペラがあることを知り、楽しむことができました。「あん」は小説、朗読劇、映画、次はオペラ。楽しみです。（坂出市プレイベント）

コラム どら寄付って？

オペラ『あん』は、タイトル通り、「どら焼きのあん」が物語の重要なモチーフになります。地元菓子メーカーの株式会社あわしま堂様（宇和公演）、株式会社ハタダ様（新居浜、宇多津公演）のご協力により、公演当日、実行委員会が会場でどら焼きを委託販売しました。オペラの中で「どら焼き～、いかがですか～♪」と歌われた効果もあってか、どの会場でも即完売！（この歌を歌って販売してくれていたスタッフもいました）売り上げの一部を、香川県のハンセン病療養所である国立療養所大島青松園自治会に寄付しました。



オペラシアターこんにゃく座

オペラ「ルドルフとイッパイアッテナ」

原作：斉藤洋『ルドルフとイッパイアッテナ』（講談社刊）
 台本：いずみ凜 作曲：信長貴富
 演出：立山ひろみ
 美術：池田ともゆき 衣裳：宮本宣子 照明：齋藤茂男
 振付：山田うん
 舞台監督：八木清市 音楽監督：萩京子
 出演：小林ゆず子、北野雄一郎、鈴木あかね、
 西田玲子、五味貴秋（ピアノ）

作品について

ある日黒ねこのルドルフは、魚屋さんに追いかけて飛び乗ったトラックで見知らぬ土地へと運ばれてしまった。そこで出会ったのが大きなトラねこ“イッパイアッテナ”。ルドルフはイッパイアッテナに、野良で生きていくためのいろいろなことを教えてもらう。その町には、飼い猫ブッチーと、宿敵・飼い犬のデビルがいた！

1987年出版、テレビや演劇、映画などでもたくさんの人に愛されてきた物語の書き下ろしオペラ。

プレイベント「歌とオペラとこんにゃく体操のワークショップ」について

公演各地のみなさんに、公演内容を紹介するとともに、こんにゃく座やオペラを身近に感じていただくために、「こんにゃく体操」といわれる身体訓練を体験したり、こんにゃく座歌役者・小林ゆず子、北野雄一郎の進行、ピアニスト・五味貴秋の演奏により、オペラ『ルドルフとイッパイアッテナ』の歌を、身体を動かして参加者みんなで歌う体験などをしてもらいました。

高知県佐川町

< 公演 >

日程：7月26日（土） 14:00開演

会場：佐川町立桜座・ホール

鑑賞者数：370名

協働団体：オペラ『ルドルフとイッパイアッテナ』を観る会

後援：佐川町教育委員会

協力：高知県合唱連盟

< 「歌とオペラとこんにゃく体操のワークショップ」 >

日程：5月25日（日） 13:00

会場：佐川町立桜座・ホール

参加者数：10名（見学者3名）



オペラ『ルドルフとイッパイアッテナ』（左から）西田玲子、小林ゆず子

舞台写真撮影：前澤秀登



北野雄一郎



鈴木あかね



「歌とオペラとこんにゃく体操のワークショップ」四万十市（左）、佐川町（右）

「『ルドルフとイッパイアッテナ』を観る会」のみなさんのご尽力もあって、たくさんの方にご来場いただきました！



終演後、出演者がお客様をお見送り♪

徳島県藍住町

< 公演 >

日程：7月27日（日） 14:00開演

会場：藍住町総合文化ホール・大ホール

鑑賞者数：264名

協働団体：徳島子ども劇場

後援：藍住町教育委員会、北島町教育委員会

協力：徳島県合唱連盟

< 「歌とオペラとこんにゃく体操のワークショップ」 >

日程：5月24日（土） 14:00

会場：藍住町総合文化ホール・小ホール

参加者数：15名（見学者2名）

協働団体：徳島子ども劇場

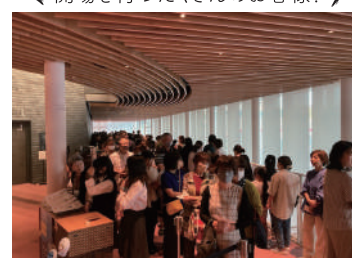


藍住町立図書館では、公演に向けて『ルドルフとイッパイアッテナ』をはじめとしたシリーズの展示も行われました！

Nice! 協働団体の皆様が、しまんとホール入口をバルーンアートで楽しく飾りつけてくださいました♪



公演当日、開場を待つたくさんのお客様！



地元の子どもたちによる合唱団「びあ・キッズ」がワークショップに参加、公演終演時出演者と一緒にオペラの中の曲を歌いました！「あいうえお〜〜♪」



とても感動しました。子どもたちが約2時間ずっと話さずに集中していることにも驚きました。人の想いやがんばりは子どもたちにも伝わるのだと実感しました。（四万十市公演）

鑑賞者のアンケートから

笑い所、泣き所、色んな感情がわきあがる素敵なオペラでした。ワークショップではお世話になりました。娘たち2人、とてもこの日を心待ちにしていました。ワークショップで習った「あいうえおのうた」覚えて歌っています。（藍住町プレイベント・公演）

声や歌がとてもきれいでした。少ない人数でもすごくパワーが感じられました。そして、ピアノもとても素敵でした。（佐川町公演）

オペラシアターこんにゃく座

こんにゃく体操による身体訓練を続け、言葉（日本語）がはっきりわかるオペラを創作上演するオペラ劇団として1971年に創立。マイクを使用しない生の歌声、ピアノを主としたさまざまな楽器を使った生演奏によるオペラ作品を多数上演している。歌役者の歌い語り演じる力によって、こどもからおとなまで楽しめる多彩な作品をレパートリーとし、年間約200公演を上演する他、さまざまなコンサートやワークショップを数多くおこなっている。公益社団法人日本劇団協議会正会員。

ワークショップ

演劇には、舞台での上演だけでなく、子どもから大人まで幅広い人々が参加できるワークショップという形があります。コミュニケーションをテーマにしたゲームや表現あそびなどを通して、参加者同士が自然に関わり合い、互いを理解し合うきっかけが生まれます。こうした体験は、年齢や立場を超えて人と人をつなぐ力を持ち、日常では得がたいコミュニケーションの場となります。

四国で「生活の中に演劇を」事業を展開するにあたって設定したテーマは、「拠点と拠点、人と人をつなぐ」です。今年度は、人と人がコミュニケーションによってつながることを実際に体験し、考えていくために、愛媛県と高知県でワークショップを実施しました。

コミュニケーション・ワークショップ

文学座の演出家であり、日本劇団協議会会長でもある西川信廣を中心としたチームが進行役となり、愛媛県、高知県の中学・高校生を対象にワークショップを行いました。演劇創作においても、私たちの日常生活においても大切な、集中力や想像力、自己の解放、そしてコミュニケーションにおける他者への反応力を養うことの大切さについて、ゲームを通して楽しい雰囲気の中で体験してもらいました。

なお、今年度参加してくれた三崎高校は、去る2023年に劇団1980の「素劇」体験ワークショップに参加。中村高校の演劇部・ダンス部は2024年、イツ・フォーリーズ『おれたちは天使じゃない』のワークショップに参加。宇和高校は今年度、こんにゃく座『あん』のプレイベントに「人権学習の発表」という形で参加してくれました。このようなご縁が少しずつ広がり、今回のワークショップ実施となりました。

愛媛県伊方町

日程：10月2日(木)
13:30～14:30／14:40～15:40(2回)
会場：愛媛県立三崎高等学校 武道場
ファシリテーター：西川信廣(文学座・演出家)、小林七緒(流山児★事務所・演出家)、高橋正徳(文学座・演出家)
参加者数：41名

高知県四万十市

日程：11月10日(月)
11:55～12:45／13:30～14:20(中学生2回)
16:00～17:30(高校生1回)
会場：高知県立中村中学高等学校
格技場(中学生)、大会議室(高校生)
ファシリテーター：西川信廣(文学座・演出家)、加納朋之・音道あいり(文学座・俳優)
参加者数：生徒60名(中学生)、生徒13名(高校生)＋教員2名

コミュニケーションを楽しむゲーム。
失敗OKの笑顔の中で真剣に遊びます！
写真中央：西川信廣
(愛媛県立三崎高等学校)

愛媛県西予市

日程：10月3日(金) 13:40～15:30
会場：愛媛県立宇和高等学校 情報処理実習室
ファシリテーター：西川信廣(文学座・演出家)、小林七緒(流山児★事務所・演出家)、高橋正徳(文学座・演出家)
参加者数：31名

高知県土佐清水市

日程：11月11日(火) 10:45～12:35
会場：高知県立清水高等学校 集会室
ファシリテーター：西川信廣(文学座・演出家)、加納朋之・音道あいり(文学座・俳優)
参加者数：生徒23名＋教員7名

※視察者は、愛媛県15名、高知県7名の合計22名でした。



3人1組でチームをつくります。ゲームが進んでいくと、チームは次々とシャッフル。
集中力と反応力を発揮します！(高知県立清水高等学校)



ゲームを通して理解してもらいたいコミュニケーションの成り立ちについて、ファシリテーターの西川信廣が高校生に語りかけます。
(高知県立清水高等学校)

愛媛新聞10月6日朝刊に三崎高校でのワークショップが伝えられました。



伊方・三崎高 来県の演出家WS



自己解放し素直に表現を

く手回しする小林さん
と高橋さんの間に飛び
込み、縄が実在するか
のようにジャンプ。縄
が見える」と盛り上が
った。
西川さんは「言葉だ
けでなく、相手のこと
を考へるつながりもコ
ミを」と話した。
「普段あまり話したこ
とがない人と一緒にゲ
ームをして楽しかった
と笑顔を見せた。
(河野梨奈)

協議会は2023年
から「生活の中に演劇
を」事業に取り組み、
芸術に触れる機会が少
ない地方で公演やコン
サートなどを開き体験
機会を創出している。
今回は演劇の手法を用
いたコミュニケーション
を、素直に表現する生
徒たち

演劇手法で想像力磨こう

演劇に親しみ普段のコミュニケーションに生かしてもらおうと伊方町三崎の高
校で2日、日本劇団協議会(東京都)によるワークショップ(W.S)があった。1年
生約40人が、ゲームを通して演劇の基礎となる想像力や反応力を刺激し、自己表現力
を磨いた。

ン力向上に重点を置き、ミ
ニケーション。想
たWSで、四国の高校
での実施は初めて。
講師は協議会長で演
出家の西川信廣さん。
同じく演出家の小林七
緒さん、高橋正徳さん
が務めた。
生徒たちは早速、想
像力が問われる「長縄
跳び」に挑戦した。実
際の縄は使わず、大き
な

報告

》コミュニケーション・ワークショップ、四国での報告《

日本劇団協議会会長 西川信廣

昨年四国の高校/中学で初めてコミュニケーション・ワークショップを実施した。コミュニケーション・ワークショップと書いたが、私は最近「つながりワークショップ」と説明している。SNSの発達で他者との「情報交換」はとても便利になったが、直接対話をして相手の表情や声、反応などから想像力を働かせて、相手の真意をくみ取り、相手とつながることが少なくなっていると思う。ワークショップを通して、人と人がつながるとはどういうことかを体感し、考えてみるのが趣旨である。

2022年から内閣府が「孤立と孤独」に関する調査を始めた。そして、2024年の調査結果によると「常に孤立や孤独を感じる」「時々感じる」「たまに感じる」人の割合が47%いたと言う。その中で、常に孤独や孤立を感じる人にスマホを1日で何時間ほど使っているかとの質問をすると、8時間以上という答えが多かったと言う。つまり、スマホでのつながりは本来の意味での「つながり」に至っていないのではと考えるのだ。

私の所属する劇団・文学座は2012年から岐阜の県立高校でコミュニケーション・ワークショップを行っている。キッカケは県下のある高校で、入学してきた140名の1年生が年間で40名ほど退校してしまい、問題行動も多発していた。学校との話し合いや授業の見学を通して、多くの原因は家庭環境に問題を抱えていて、そのことから自己肯定感の欠如、承認欲求が満たされていないなどの子供が多いことが分かってきた。その為、友達が上手く作れない、学校が自分の居場所にならないなどのことが原因ではないのかと推測した。そこで、それを演劇的手法で、一人でも退校者を減らし、子供たちが学校を自分たちの居場所に思えるようにならないかとの思いで始まった。年に3回、1回約90分から100分のワークショップなのだが、こちらの想像を超えた結果になった。まず、退校者数が40名から9名になった。問題行動も4分の1に減った。たまたま1年目の偶然の結果かと思ったのだが、翌年も、また新たに始めた高校も、前年の数値より良くなって、その効果に私たち自身驚きだった。県立高校でのワークショップは現在文学座で17校、岐阜の劇団で5校で行っている。それぞれの高校で抱える問題は様々だが、学校側も私たちのやりやすいよう教育委員会、校長、教職員がみな協力的なことが成果を上げることに繋がっている。



この岐阜での経験を踏まえて、2025年愛媛と高知でワークショップを実施した。10月2日三崎高校、3日宇和高校、11月10日中村中学/高校、11日清水高校の5校である。それぞれの学校で多少の違いはあったが「集中力」「想像力」「反応力」を求めるゲームに初めは戸惑いもあったが、ワークショップ後半には、様々な変化が生まれていった。三崎高校は生徒の約半分が他の地域から来て寮で生活している。生徒からの感想では「クラスメートの新しい面を見た」「自分に新しい面があることを発見した」など他者や自分に新発見をしていた。宇和高校ではリーダーシップのある生徒についていく傾向があるらしいのだが、ワークショップ中はみな積極的だった。中村中学では2クラスで実施し「相手を思いやることを知った」「人間関係がうまくいくようなヒントをもらえて嬉しかった」との生徒の声があった。中村高校は希望者だけの参加だったが、希望者だけに全員とても積極的だった。「話すだけでなく、目を合わせたり、身振り手振りで表現することもコミュニケーションと分かった」。私からの、「若い時に思い切りやった失敗は良い経験になる」を受けて果敢にゲームに集中した結果「失敗をおそれずに挑戦することが出来た。これからも挑戦する」「居心地が良かった」との感想もあった。最後の清水高校では、先生も参加して下さり、生徒からは「クラスの仲が深まった」「全力で恥を捨てて楽しめてよかった」「コミュニケーションに決まりはなくて、表現にも決まりはない。そんな学びを大切にしたい」との感想がよせられた。各校に視察にいらした見学者からは「文化、芸術は敷居が高いと思っていたが、興味を持つキッカケになった」「昨年、登校しづらかった生徒が楽しんで様子を見て、とても嬉しかった」「仲間の壁がはがされて一体化して見えた」「子供たちが心を開いていた」「教員にもやって欲しい」「スマホ時代の子供たちに有効だ」「登校しづらい子のコミュニケーションアップに使える」「普段見られない表情や行動が見られ、仲間の本来の姿を見た」などの感想を頂いた。

不登校や子供の自死が増えている今日、私は、演劇と教育がタッグを組み、生徒同士、教員と生徒のつながりを作り、学校が子供たちの居場所になることによって、いじめや、不登校、問題行動、退校などの抑止に、有効であることを、四国のワークショップで再認識した。それが、全国へ広がること期待している。

最後になるが、開催にあたり、貴重な授業時間をさいてくださった各校の先生方、ご尽力いただいたコーディネーターの皆様に、心より感謝を申し上げたい。

鴻上尚史演劇ワークショップ・講演会

「生活の中に演劇を」事業でサードステージの鴻上尚史は、3年間にわたり自身の故郷でもある愛媛県新居浜市で、公演（2023）やワークショップ・講演会（2023～25）を継続しています。

ワークショップには幅広い年代の方々が参加。表現やコミュニケーションを楽しむシアターゲームやインプロヴィゼーション（即興）を楽しみました。新居浜市立大生院中学校では、「君はどう生きるか」と題した講演会を開催。「シンデレラの継母はなぜシンデレラをいじめたのか」「桃太郎の犬はなぜきび団子1つで命がけの鬼との戦いについていったのか」などと中学生に問いかけ、自分ごととして考え、発表してもらいました。

愛媛県新居浜市

<ワークショップ>

日程：10月23日（木） 18:00～21:00

会場：あかがねミュージアム 多目的ホール

ファシリテーター：鴻上尚史（サードステージ 作家・演出家）

参加者数：28名

共催：あかがねミュージアムサポータークラブ

後援：新居浜市教育委員会

協賛：医療法人たなか内科クリニック

<講演会「君はどう生きるか」>

日程：10月24日（金） 13:30～14:50

会場：新居浜市立大正院中学校 体育館

講師：鴻上尚史

参加者数：120名

共催：あかがねミュージアムサポータークラブ

後援：新居浜市教育委員会

協賛：医療法人たなか内科クリニック

ワークショップでは、コミュニケーションにとって重要な「声」についても講義。それをふまえて参加者で発表も。



11月2日愛媛新聞朝刊で、ワークショップの様子が掲載されました

豊かな表現で 内面も豊かに
新居浜市出身の作家・演出家、鴻上尚史（しげのり）氏が、10月23日（木）18時から21時、あかがねミュージアム多目的ホールで、ワークショップを開催した。参加者は約30人。ワークショップでは、表現やコミュニケーションを楽しむシアターゲームやインプロヴィゼーション（即興）を楽しみました。新居浜市立大生院中学校では、「君はどう生きるか」と題した講演会を開催。「シンデレラの継母はなぜシンデレラをいじめたのか」「桃太郎の犬はなぜきび団子1つで命がけの鬼との戦いについていったのか」などと中学生に問いかけ、自分ごととして考え、発表してもらいました。



参加者と輪になり、笑顔で交流する鴻上尚史さん（中央）＝新居浜市



表現する楽しさを参加者と共有する鴻上尚史さん（左から2人目）＝新居浜市

11月23日ジュニアえひめ新聞で、講演会の様子が掲載されました。

【紙面編集】植田浩司

第634号 4 彩り豊かに角切り野菜

4・5 相似な立体の体積比

7 アイドル風おしゃれ紹介

愛媛新聞社 〒790-8511 松山市大手町1-12 ☎089(935)2111

アイル!ピント
ジュニアえひめ新聞

考えることやめないで
かんが

「君はどう生きるか」鴻上さん 故郷新居浜で講演 大生院中

作家・演出家として活躍する鴻上尚史さんが10月下旬、古里の新居浜市に帰郷し、大生院中学校で「君はどう生きるか」と題して講演しました。「勉強は何のためにするのか」「なぜ、人と人は意見がぶつかるのか」といった素朴な疑問について、全校生徒約110人の前で語りました。講演の概要を紹介します。

何のために学校へ行くのでしょうか。それは人との付き合い方を学ぶためです。誰とでも仲良くなんて、しなくていい。そんな不可能です。でもね、人を無視するのはいけないよ。「一年生になったら」という歌がありますね。あの歌で友達がい、臆病にならなくていい。自分の意見を言わないと、何も言わない人だと思われてしまう。勉強は何のためにするのか。学校の勉強には、正解があります。でも社会に出ると、正解のない問題にいくつも出合います。言葉や知識、物事の見方を知っていると、いろんな対応ができる。「自分ばかりだ」なんて思わないで。大人でも、米国のトランプ大統領がどこへ向かうのか。自分の意見を言わないと、何も言わない人だと思われてしまう。勉強は何のためにするのか。学校の勉強には、正解があります。でも社会に出ると、正解のない問題にいくつも出合います。言葉や知識、物事の見方を知っていると、いろんな対応ができる。「自分ばかりだ」なんて思わないで。大人でも、米国のトランプ大統領がどこへ向かうのか。自分の意見を言わないと、何も言わない人だと思われてしまう。勉強は何のためにするのか。学校の勉強には、正解があります。でも社会に出ると、正解のない問題にいくつも出合います。言葉や知識、物事の見方を知っていると、いろんな対応ができる。「自分ばかりだ」なんて思わないで。大人でも、米国のトランプ大統領がどこへ向かうのか。自分の意見を言わないと、何も言わない人だと思われてしまう。勉強は何のためにのかと自問してみよう。

「言葉」を獲得しよう。大きめの本屋さんに行って、エッセーの棚の前に立とう。本を取って最初のページの3行を読む。自分に合わなければ、次の本を取る。あなたのモヤモヤを言葉にしてくるの、いい作品だ。気に入った作者を見つけて、その人の言葉を全部、体に入れよう。（まとめ・小田良輔）

秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場

「星をかすめる風」

原作：イ・ジョンミョン「星をかすめる風」
鴨良子訳（論創社刊）
脚本・演出：シライケイタ
美術：乗峯雅寛 照明：阿部康子 音楽：加藤史崇
音響：佐久間修一 衣装：宮岡増枝
映像：浦島啓 舞台監督：松橋秀幸
宣伝美術：小田善久 イラスト：鈴木理子
製作：福島明夫、沼田朋樹 企画協力：諭創社
出演：葛西和雄、広戸聡、板倉哲、大木章、島本真治、
北直樹、中川為久朗、高山康宏、岡山豊明、
矢野貴大、塚原正一、藤代梓、安田遼平、
傍島ひとみ、小切伊知子、佐藤良唯

作品について

終戦間際の福岡刑務所。看守の杉山が何者かに殺され、若い看守、渡辺は杉山を殺した犯人捜しを命じられる。聴取を進めていた渡辺は、日本名「平沼東柱」こと「尹東柱（ユン・ドンジュ）」という若い詩人が関係していると確信する。はたして、この人物は何者なのか？杉山を殺したのは一体誰なのか？事実を明らかにした渡辺の前に、意外な真実が待っていた…。韓国の国民的詩人・尹東柱の美しい詩に彩られた壮大なドラマ。

トークイベントについて

プレイベントとして、『星をかすめる風』の背景や沖縄とのつながりについて考えるトークイベントを2か所で開催しました。

トークイベント

【戦争と個人と文化

——朝鮮半島から来た詩人・尹東柱を通して考える】

ゲスト：白充（ベク・チュン）氏

日程：8月30日（土） 14:00

会場：うるみん（うるま市健康福祉センター）視聴覚室A

参加者数：30名

内容：尹東柱の生涯や人物像、彼の詩がどのように評価されているのか、彼の生きた時代がいかに“ありのまま”でいることが難しい時代だったかなど、現代社会の問題とも結び付けながら、白充弁護士に講演いただきました。また、文化芸術の意義について、物事を様々な視点から見ることができたり、世の中の動きに対して感性を磨いたりできる重要な機会になるということを中心にお話いただきました。



『星をかすめる風』

撮影：村井タ



『星をかすめる風』（左から）矢野貴大 岡山豊明

撮影：村井タ

トークイベント

【星をかすめたのは誰か

——韓国国民的詩人・尹東柱とアジア・沖縄】

ゲスト：呉世宗（オ・セジョン）氏

日程：8月31日（日） 14:00

会場：ジュンク堂那覇店地下1階イベント会場

参加者数：40名

内容：琉球大学人文社会学部の呉世宗教授に、尹東柱の詩の世界について、彼の生い立ちや当時の時代背景を紹介しながら、また『星をかすめる風』の物語にも時折触れながら、深く掘り下げてお話いただきました。



沖縄県うるま市

＜公演＞

日程：11月16日（日） 13:00開演

会場：うるま市民芸術劇場 響ホール

鑑賞者数：320名

共催：うるま市教育委員会

後援：沖縄タイムス、琉球新報、沖縄県教職員組合、
沖縄県高等学校障害児学校教職員組合、第4次嘉手
納爆音差止訴訟原告団、第3次普天間米軍基地爆音
訴訟団

沖縄県浦添市

＜公演＞

日程：11月18日（火） 19:00開演

会場：アイム・ユニバースてだこホール

鑑賞者数：446名

共催：浦添市

後援：沖縄タイムス、琉球新報、沖縄県教職員組合、
沖縄県高等学校障害児学校教職員組合、第4次嘉
手納爆音差止訴訟原告団、第3次普天間米軍基地
爆音訴訟団

協力：アイム・ユニバースてだこホール



うるま市のワークショップ

＜おとなのための演劇ワークショップinうるま＞

日程：10月18日（土） 10:00／14:00

会場：うるま市生涯学習・文化振興センター ゆらてく 研修室1

進行役：佐藤尚子、白木匡子

参加者数：9名（10:00）／19名（14:00）

内容：ペアになって息をそろえてバランスとをるストレッチ、
相手との関わりにおける身体の動きや表現を体験するシアターゲー
ム、参加者みんなで世界観を共有する詩の朗読などを行いました。

＜おとなのための演劇ワークショップ＞

日程：8月29日（金） 18:30

会場：アイム・ユニバースてだこホール 市民交流室

進行役：佐藤尚子、小切伊知子

参加者数：7名

内容：「大きな声を出すのが苦手」「発音が苦手」などの参加者の声
を反映して、ミスを怖がらないこと、台詞の言葉に頼らず身体全体で
相手に働きかける「伝え方」の基本を参加者で共有しました。また、
詩の朗読や戯曲の読み合わせを通して、書いてあることの面白さに
加えて、自分で読んでみて感じる楽しさを体験してもらいました。



浦添市のワークショップ

鑑賞者のアンケートから

白先生の熱く、しかし冷静な御講演に感銘を受けました。
劇団の皆様のお話も伺え、本番が楽しみです。
（うるま市トークイベント）

木から森をみる感じというか、1人の実在の
人物を中心に、大きな歴史の流れも見える、
とてもすばらしい作品だと感じました。
（浦添市公演）

日常で自分が表現することが少なくなってきた、
今日声を出して動くことができてとっても
楽しかったです！
（うるま市ワークショップ）

自分の記憶にこれからも残り続けていくであろう、貴重な体験でし
た。映像ではなく実際に見たことで、人の人生を共に生きてきたよ
うな気がします。辛かったし、おもしろかったし、悲しかったし、優し
さを感じたし、言葉にできない感情をたくさん感じた濃厚な2時
間です。これからも私とともに生きる唯一無二の作品です。
（うるま市公演）

秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場

1964年、日本演劇のパイオニアである秋田雨雀と土方与志に教えを
受けた俳優、演出家8名を中心に結成。劇団性に基づくアンサンブ
ルの重視、アクチュアルな演劇創造を目指し、日本近現代演劇、海外
の作品などを意欲的に上演。東京のみならず全国公演、国際交流、
青少年のための公演と幅広く展開。新たな若い才能の発掘と演劇技
術の継承、演劇を目指す方の道を拓くことを目的として付属養成所も
運営。公益社団法人日本劇団協議会正会員。

こまつ座

「父と暮せば」——沖縄特別公演（朗読）

作：井上ひさし 演出：鶴山仁
出演：松角洋平、瀬戸さおり
舞台監督：森和貴 演出部：濱野みどり
照明操作：小沢淳 音響操作：金子幸世
統括：井上麻矢

作品について

舞台は原爆投下から三年後の広島。市立図書館で働きながらひとり静かに暮らす美津江の胸の内には、ほのかな恋心が芽生え始めていた。そんな美津江の前に、まったく突然に父竹造があらわれる。しかし核兵器のもたらしたおぞましい悲劇は可憐な娘の心にも大きな傷跡を残していた。生きる喜びをなくしてしまった娘にふたたび希望の光を甦らせるために、いま、父は全身全霊で娘に語りかける。

井上ひさしが紡いだ父と娘の哀しみと希望の対話。戦後80年の沖縄で、朗読により上演しました。

プレイベント「『父と暮せば』イベント&ワークショップ」について

『父と暮せば』公演を開催した那覇市と宮古島市で、父・竹造を演じた松角洋平さんとこまつ座代表・井上麻矢さんによる、作品の誕生秘話や作品の時代背景、稽古中の裏話などを盛り込んだトークイベントを実施しました。



（上から）トークイベント（那覇市）とワークショップ（宮古島市）



「父と暮せば」——沖縄特別公演（朗読）（左から）瀬戸さおり、松角洋平

沖縄県那覇市

< 公演 >

日程：11月19日（水） 13:00開演
会場：那覇文化芸術劇場なは一と 小劇場
鑑賞者数：43名

< 『父と暮せば』トークイベント >

日程：10月25日（土） 14:00
会場：ジュンク堂書店 那覇店
参加者数：12名



沖縄県宮古島市

< 公演 >

日程：11月20日（木）19:00 / 21日（金）14:00
会場：宮古島市文化ホール（マティダ市民劇場）
鑑賞者数：294名（うち中高生235名）
※市内中学校の鑑賞会としても実施
後援：宮古島市教育委員会、一般社団法人宮古島市文化協会
協力：Booksきょうはん宮古南店

< 『父と暮せば』トーク&ワークショップ >

日程：10月26日（日） 10:00
会場：宮古島市中央公民館 研修室
参加者数：20名
協働団体：宮古島市教育委員会

宮古島市公演では、
中学生たちがバスで劇場へ♪



鑑賞者のアンケートから

平和、不戦を考える上で、演劇の力は極めて大きい。
『木の上の軍隊』『母と暮せば』と共に3部作を上演し続けておられるこまつ座の今後の奮闘、沖縄での継続公演をお願いしたいです。
（那覇市公演）

朗読劇は初めて観ましたが、普段見る劇とは違って小さな動きといくつかの小道具だけなのに、ここまで迫力も情景のイメージもできるんだと驚きました。（宮古島市公演）

今回、大好きな『父と暮せば』を初めて舞台上で鑑賞することがこの宮古島でできてびっくりしています。原作文庫本を大切に持っています。（宮古島市公演）

声がとても大きかったし、話を聞いているだけでも、気持ちが込もっていたり、シーンごとに声のトーンを変えていたりしていたのが、とてもすごくて、今後も演劇を見たいです。（宮古島市中学生）

改めて原爆の恐ろしさを実感できた。またこれを二人で演じるというのはとてもすごいと感じた。（宮古島市中学生）

こまつ座

座付作家井上ひさしに関係する作品を中心に上演する制作集団。1983年1月に創立し、84年4月『頭痛肩こり樋口一葉』公演で旗揚げ。以降、新作、再演、こまつ座以前の井上作品も織り交ぜて、年平均4〜6作品を上演し続けている。演出に木村光一、栗山民也、鶴山仁、丹野郁弓、東憲司、長塚圭史などを迎え、東京では、おもに新宿の紀伊國屋ホール、紀伊國屋サザンシアターTAKASHIMAYAで公演。北海道から九州までの劇場や全国組織の演劇鑑賞団体の各ブロックも巡演し年間のステージ数は200〜250にのぼる。出演者、スタッフとも作品ごとに依頼をし、その作品だけの一座を組むプロデュースシステムをとっている。公益社団法人日本劇団協議会正会員。

コラム 青年劇場・こまつ座の活動を支えてくれた沖縄の3団体

公益社団法人日本劇団協議会には、日本全国から50の劇団・演劇団体が加盟しています（2026年1月現在）が、沖縄県からは3団体が正会員として加盟しています。今年度の青年劇場、こまつ座の沖縄での公演やプレイベント、ワークショップの実施にあたり、この3団体、エーシーオー沖縄、Theater TEN Company、TEAM SPOT JUMBLEがアドバイザーとなり支えてくれました。

7月から公演前まで、オンライン合同ミーティングや個別の打合せを通して、協力をお願いするキーパーソンや広報について相談にのってもらいました。チラシ配布やラジオ告知などにも動いていただき、今後の活動に向けて、劇団同士が協力しあう心強い基盤ができました。

無名塾

『幽霊』

作：ヘンリック・イブセン 翻訳：青山杉作
演出：林清人 装置：林清人 音楽：日高哲英
照明：鈴木啓子 効果：山岸和郎
衣裳：竹林正人 舞台監督：川村進
宣伝美術：市川きよあき
イラスト：増田恵 文：角田美和
出演：小宮久美子、中山研、平井真軌、松浦唯、島田仁

作品について

19世紀、ノルウェー西部のフィヨルドの町。
資産家で名士だったアルヴィング大尉が亡くなって10年が過ぎ、屋敷には未亡人のアルヴィング夫人、住み込みの若い娘レジーネが暮らしている。アルヴィング夫人は、亡き夫の遺産で建設した孤児院の開院式典を迎えようとしている。外国で暮らす一人息子のオスワルトも、晴れの日に数年ぶりに帰郷してきた。
尊敬された亡夫、気丈な女主人、才能ある一人息子、慈善事業…、しかし、この完璧に見える家族には、目をそらし、隠し続けてきた恐ろしい秘密があった——。
目に見えぬ因襲に縛られ、偽善にすぎる人間の姿を赤裸々に描いたイブセンの問題作は、発表当時、母国で上演禁止となった。しかし、140年前に提示された家族と社会の持つ深刻な問題は、今も、今だからこそ、よりリアルに人間の在り方を我々に問い続ける。
能登演劇堂開館30周年・無名塾交流40周年を記念し、無名塾が演劇史に残る名作に取り組みました。

プレイベント、バックステージツアーについて

能登演劇堂開館30周年・

無名塾交流40周年アニバーサリートークショー

登壇者：仲代達矢、小宮久美子、中山研、島田仁、林清人、八崎和美
司会：山本弘人

第1部では、間近に迫った『幽霊』の上演にあたって、その作者であるヘンリック・イブセンという人物に焦点を当てながら、彼の主要作品の解説をすると共に、その作品の魅力に迫る話題を展開しました。
第2部では、無名塾と、能登演劇堂が建つ七尾市中島町の交流を取りあげ、どうしてそれが始まったか、また、どのように発展して能登演劇堂の建設に辿り着いたかなど、これまでの歴史をスライドを見ながら住民と共に振り返ったひとときでした。
とりわけ能登は2024年元旦の地震で被災していることから、そういう困難な状況でも、たがいの交流から得たものを土台にして、どういう未来を創造するのかが語られました。



『幽霊』（左から）島田仁、小宮久美子

撮影：中野久明



『幽霊』（左から）小宮久美子、島田仁、中山研

撮影：中野久明



北國新聞 2025年9月28日

『幽霊』バックステージツアー

案内役：川村進（舞台監督）、山本弘人（制作）

同行：小宮久美子、中山研、平井真軌、松浦唯、島田仁



10月13日の公演終演後、希望したお客さまに、出演者の同行のもと、舞台上の椅子やテーブル・ソファの配置、小道具や装置の作りなど、舞台監督や制作者が丁寧に説明しながら見て回ってもらいました。最後には、この作品では使いませんでしたが、能登演劇堂の舞台機構の特徴となっている大扉の開閉も披露しました。



バックステージツアーでは、舞台上で照明効果の体験も！

石川県七尾市

< 公演 >

日程：10月10日（金）～15日（水） 各14:00開演

会場：能登演劇堂

鑑賞者数：1339名

協働団体：公益財団法人演劇のまち振興事業団

協力：株式会社仕事



演劇堂へは地元最寄り駅や金沢市からバスができました！



公演時、ロビーには地元商店の出店ブースが並びます♪

鑑賞者のアンケート から

無名塾が能登で活動しておられることを今回初めて知りました。そして、初めて無名塾の舞台を観劇しました。『幽霊』では、息子を溺愛する母親と自分が重なり苦しい気持ちにもなり、引き込まれました。また、能登演劇堂に来たいと思います。

トークショーにも参加して、とても楽しみにしていました。舞台もすばらしく、俳優さんたちの演技も心がこもっていました。

心の葛藤や混乱、人間のありのままの感情が強く表現されていて心にしみました。

『幽霊』を拝見し、その期待通りの熱演に感動しています。能登演劇堂のお陰で無名塾をはじめ、本格的な演劇に触れることが身近に出来、感謝です。この幸せが末長く続くことを祈っています。開館30周年、交流40周年とはあらためてびっくり!!

無名塾

無名塾は、仲代達矢と宮崎恭子の自宅稽古場から自然に生まれた演劇の私塾。1977年に一般公募を始め、少人数制で3年間、礼儀や発声、歩き方まで徹底的に鍛える。舞台を通じて実践を重ね、多くの俳優が巣立った。やがて私塾の枠を超え、全国から公演を待たれる演劇集団へと成長。「無名に戻る場所」として、若者もキャリアを積んだ者も共に学び合い、半世紀近くにわたり「生涯修業」の精神を貫いている。公益社団法人日本劇団協議会正会員。

生活の中に演劇を - 演劇を楽しむ未来計画3 -

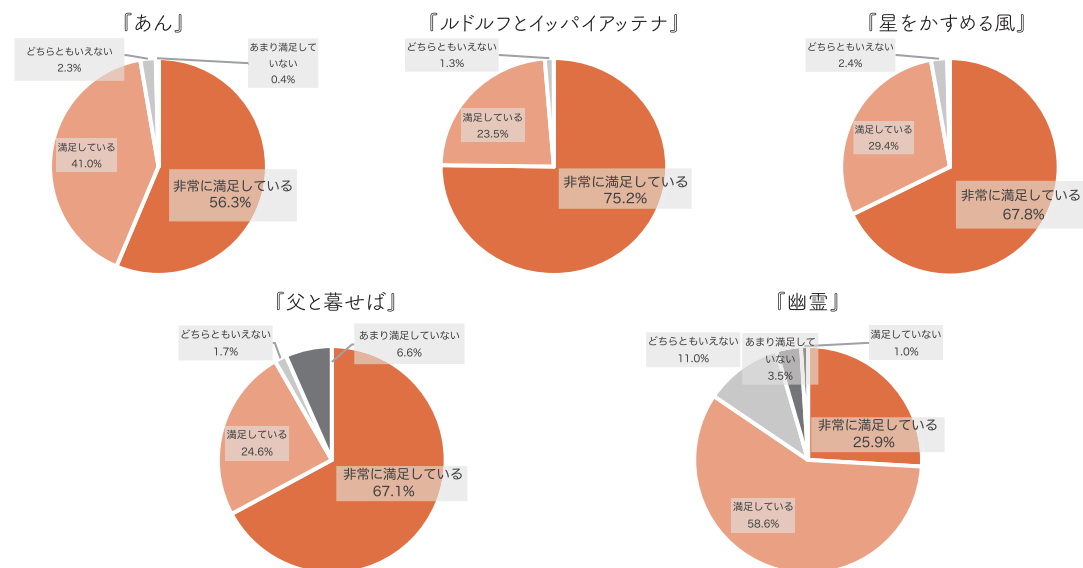
アンケートからわかること

公演

四国では、オペラシアターこんにゃく座『あん』を愛媛県と香川県で、同じく『ルドルフとイッパイアッテナ』を高知県と徳島県で上演しました。沖縄県では青年劇場『星をかすめる風』とこまつ座『父と暮せば(朗読)』を、石川県では無名塾『幽霊』を上演しました。

「高い公演への満足度」について答えてくださったお客様のうち、約85～99%の方にご満足(非常に満足+満足)いただくことができました!

「今回の公演にどのくらい満足していますか？」

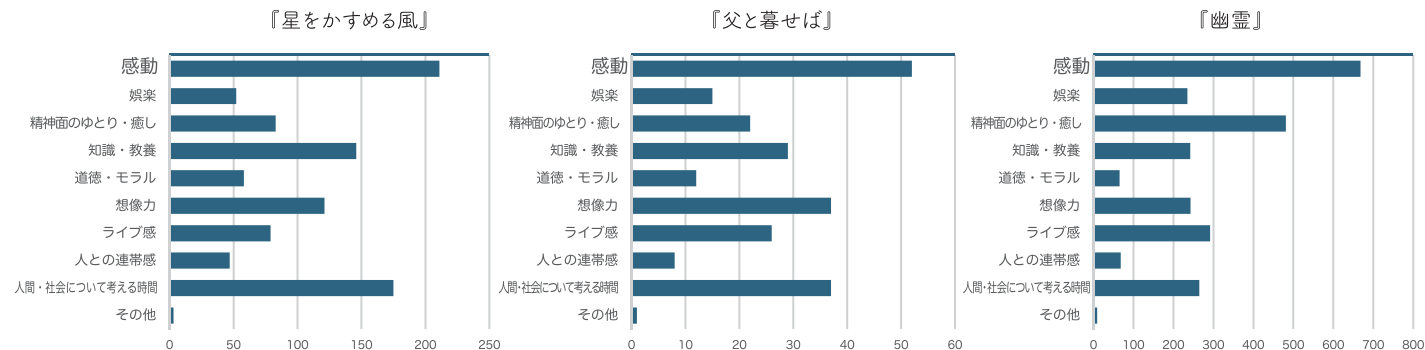
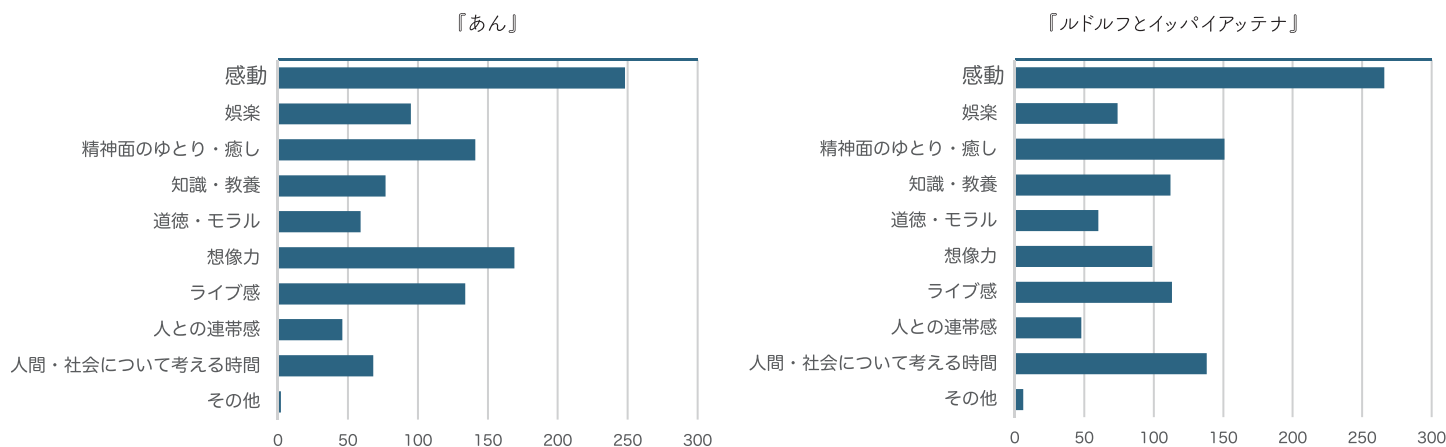


演劇・オペラで分かち合う感動

「演劇・オペラをみることで何を得られますか」という設問に対して、5作品のすべてで、第一位が「感動」になりました。また「精神面のゆとり・癒し」という回答も多く見受けられました。観劇を通して、みんなで感動を分かち合い、明日への活力を取り戻す、そんな演劇・オペラの力を感じていただいています。

また、「芸術は社会をうつす鏡」といわれます。「人間・社会について考える時間」という回答が多かったのも、日常の中では失われがちなそんな時間を観劇を通してもつことができ、と感じている方が多いということだと思われます。

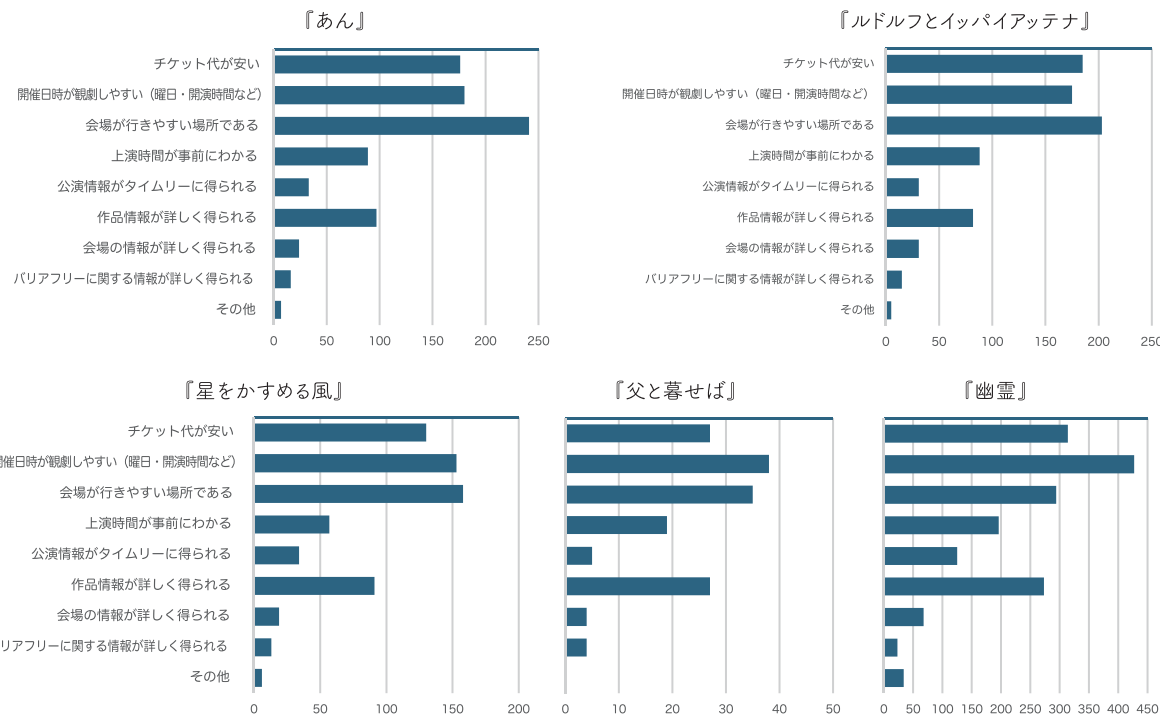
「演劇・オペラをみることによって、何が得られると思いますか？」



観劇しづらい要因は？

家族・友人を観劇に誘うときの大切な基準として、どの作品でもすべて「会場の行きやすさ」「観劇しやすい日時」「チケット代の安さ」が上位に上がりました。会場と日時については、都市部に比べて「近隣に劇場が少ない」「交通アクセスが悪いから、平日や夜の公演は出かけにくい」という地方の状況をあらわしています。またチケット代については、全般的な物価上昇にあわせて、観劇チケット代も全国的に高騰している状況があります。

「家族・友人等を観劇に誘うとき、どのようなことがあったら誘いやすいですか？」

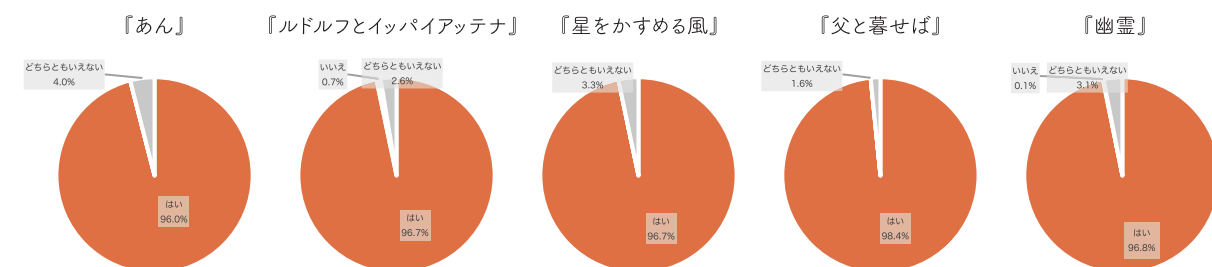


地域に関わらず観劇の機会を！

それでも人々は観劇の機会を求めています。「今後も演劇・オペラなどを鑑賞したいと思いますか」という設問では、どの作品においても、回答者中96%以上の方々が「はい」と答えています。

これからも、都市部だけでなく地方においても鑑賞機会の充実が求められています。

「今後も演劇・オペラなどを鑑賞したいと思いますか？」

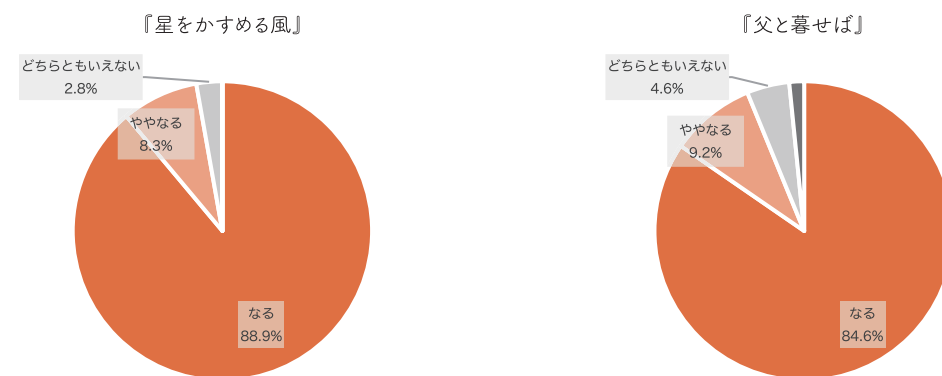


戦争を題材にした作品を通して平和について考える

「生活の中に演劇を」事業では、演劇が、各地域の社会的課題の解決にその力を発揮できないかと考えています。沖縄県での活動のテーマは「戦争証言を語り継ぎ、平和教育につなげる」。うるま市と浦添市では青年劇場『星をかすめる風』（18～19ページ）、那覇市と宮古島市ではこまつ座『父と暮せば（朗読）』（20～21ページ）、いずれも戦争を題材に扱った作品を上演、あわせてトークやワークショップなどの関連イベントも行いました。

観劇された方々に「戦争証言を演劇にすることで平和学習になると思いますか」とおたずねしたところ、**全回答者中、「なる」というご意見を『星をかすめる風』では88.9%、『父と暮せば（朗読）』では84.6%**いただきました。

戦争証言を演劇にすることで平和学習になると思いますか？

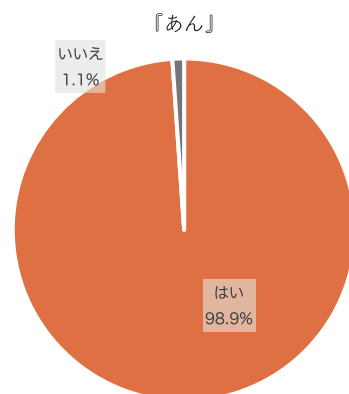


人権啓発や地域の課題解決に

今年度の「生活の中に演劇を」事業で上演した、オペラシアターこんにゃく座『あん』は、ハンセン病を患った女性と人々の交流を描いた作品です。この公演では、偏見や差別のない社会をめざし、「どら寄付」（9ページ参照）をはじめ多くのお客様、企業や団体の方々にご協力をいただきました。

ご観劇いただいたお客様に、「こういった取り組みは、人権啓発や地域の課題解決につながると感じますか」とおたずねしたところ、全回答者中**98.9%のみなさんから「はい」とご意見をいただきました。**

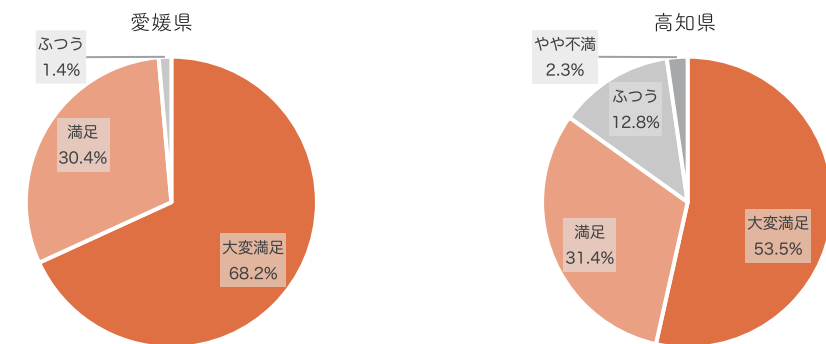
こういった取り組みは、人権啓発や地域の課題解決につながると感じますか？



コミュニケーション・ワークショップ

「生活の中に演劇を」事業では、四国、沖縄県、石川県でそれぞれ活動テーマを設けています。四国のテーマは、「拠点と拠点、人と人をつなぐ」。人と人、人と社会をつなぐためには、コミュニケーションが大切です。演劇は総合芸術、つまりコミュニケーションで成り立つ芸術といわれます。このコミュニケーションの大切さ、楽しさを広く体験してもらうプログラムがコミュニケーション・ワークショップです。今年度は試験的に愛媛県、高知県で実施しました（12～15ページ参照）。

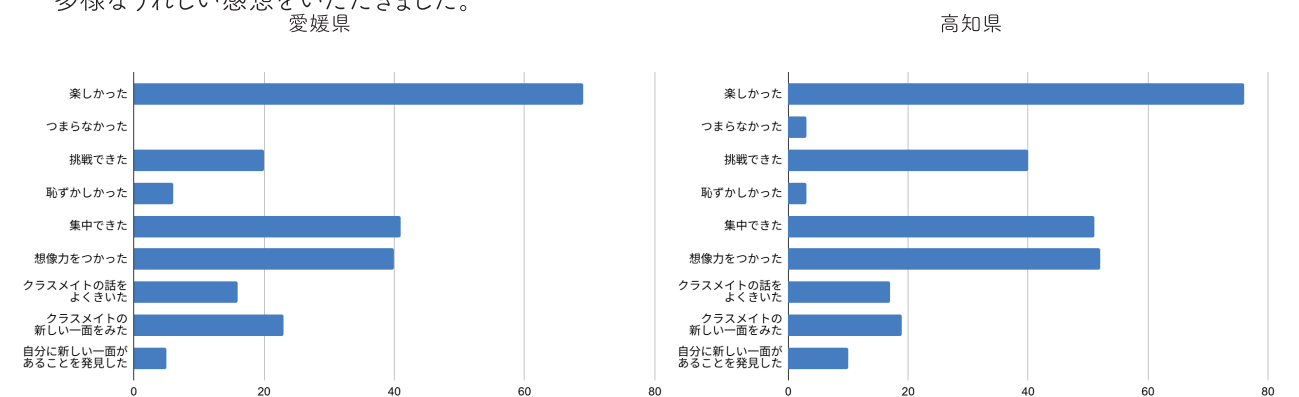
学校に先生以外のおとながやって来る。しかも演劇の演出家や俳優です。そして取り組むのは「ワークショップ」。きっとほとんどの生徒が初めての経験だったのではないのでしょうか。それでも、実際に体験したあとの感想のうち、「大変満足」+「満足」の割合が**愛媛県では98.6%、高知県では84.9%**という高い数値となりました。



集中力と創造力を使って「楽しむ」コミュニケーション

ワークショップで感じたことを参加してくれた高校生にたずねると、愛媛県、高知県、いずれも「楽しかった」「集中できた」「想像力を使った」が上位になりました。他者とコミュニケーションするということは、集中力と想像力があるけれど、楽しい!ということですね。

また「間違えることが多かったけど、恥ずかしいより楽しいという気持ちがでかかった」「みんなが協力して遊ぶことができてよかった!クラスの仲も深まった!」「いつもと違う自分やみんなの一面を発見できた」といった多様なうれしい感想をいただきました。

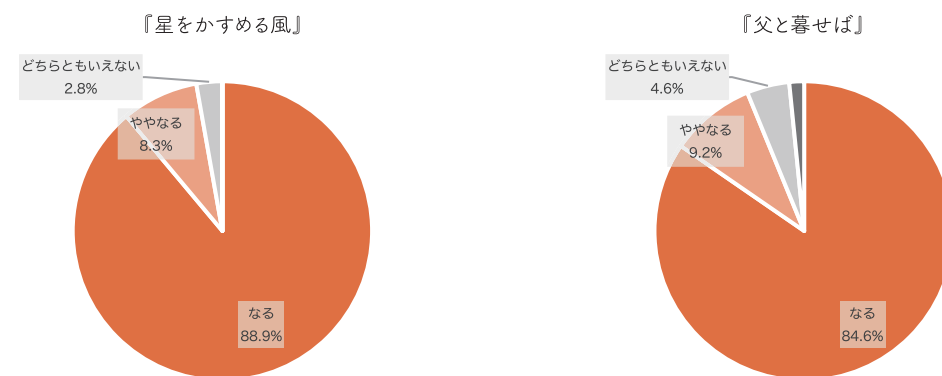


》戦争を題材にした作品を通して平和について考える《

「生活の中に演劇を」事業では、演劇が、各地域の社会的課題の解決にその力を発揮できないかと考えています。沖縄県での活動のテーマは「戦争証言を語り継ぎ、平和教育につなげる」。うるま市と浦添市では青年劇場『星をかすめる風』（18～19ページ）、那覇市と宮古島市ではこまつ座『父と暮せば（朗読）』（20～21ページ）、いずれも戦争を題材に扱った作品を上演、あわせてトークやワークショップなどの関連イベントも行いました。

観劇された方々に「戦争証言を演劇にすることで平和学習になると感じますか」とおたずねしたところ、**全回答者中、「なる」というご意見を『星をかすめる風』では88.9%、『父と暮せば（朗読）』では84.6%**いただきました。

『戦争証言を演劇にすることで平和学習になると感じますか？』

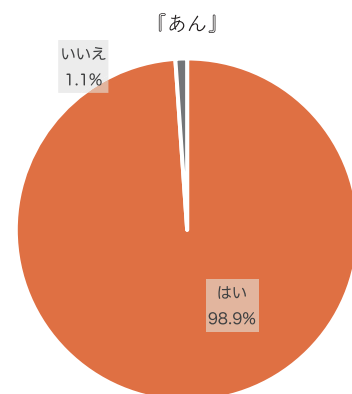


》人権啓発や地域の課題解決に《

今年度の「生活の中に演劇を」事業で上演した、オペラシアターこんにゃく座『あん』は、ハンセン病を患った女性と人々の交流を描いた作品です。この公演では、偏見や差別のない社会をめざし、「どら寄付」（9ページ参照）をはじめ多くのお客様、企業や団体の方々にご協力をいただきました。

ご観劇いただいたお客様に、「こういった取り組みは、人権啓発や地域の課題解決につながると感じますか」とおたずねしたところ、全回答者中**98.9%のみなさんから「はい」とご意見をいただきました。**

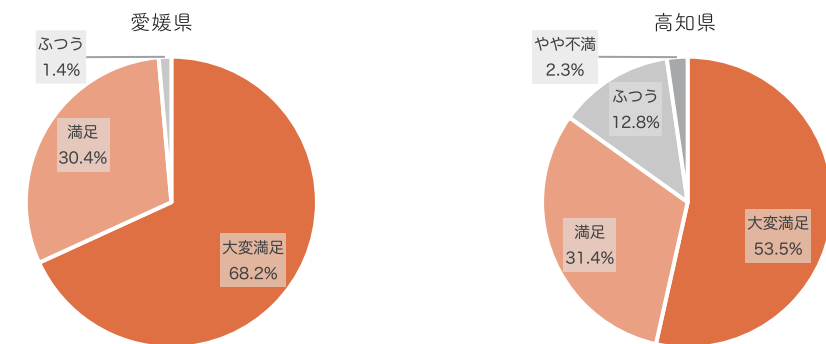
『こういった取り組みは、人権啓発や地域の課題解決につながると感じますか？』



コミュニケーション・ワークショップ

「生活の中に演劇を」事業では、四国、沖縄県、石川県でそれぞれ活動テーマを設けています。四国のテーマは、「拠点と拠点、人と人をつなぐ」。人と人、人と社会をつなぐためには、コミュニケーションが大切です。演劇は総合芸術、つまりコミュニケーションで成り立つ芸術といわれます。このコミュニケーションの大切さ、楽しさを広く体験してもらうプログラムがコミュニケーション・ワークショップです。今年度は試験的に愛媛県、高知県で実施しました（12～15ページ参照）。

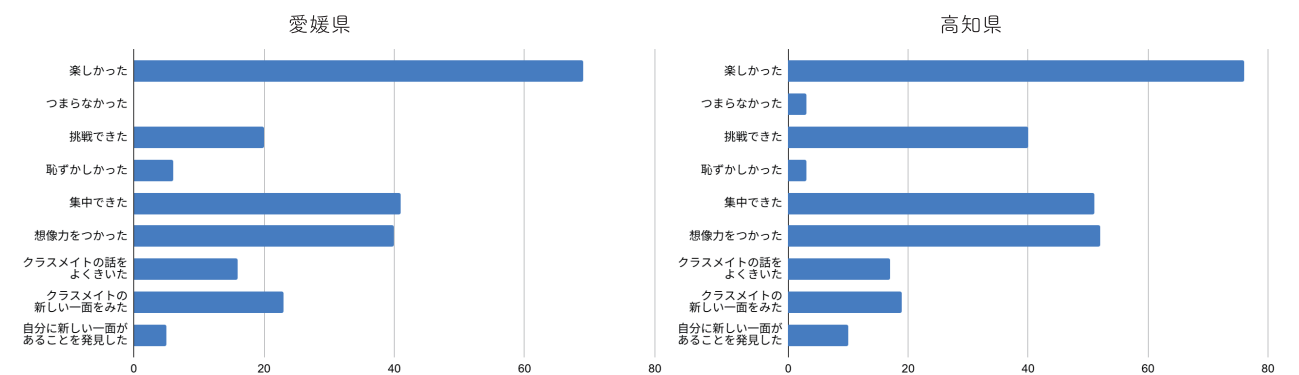
学校に先生以外のおとながやって来る。しかも演劇の演出家や俳優です。そして取り組むのは「ワークショップ」。きっとほとんどの生徒が初めての経験だったのではないのでしょうか。それでも、実際に体験したあとの感想のうち、「大変満足」+「満足」の割合が**愛媛県では98.6%、高知県では84.9%**という高い数値となりました。



》集中力と創造力を使って「楽しむ」コミュニケーション《

ワークショップで感じたことを参加してくれた高校生にたずねると、愛媛県、高知県、いずれも「楽しかった」「集中できた」「想像力を使った」が上位になりました。他者とコミュニケーションするということは、集中力と想像力があるけれど、楽しい!ということですね。

また「間違えることが多かったけど、恥ずかしいより楽しいという気持ちがでかかった」「みんなが協力して遊ぶことができてよかった!クラスの仲も深まった!」「いつもと違う自分やみんなの一面を発見できた」といった多様なうれしい感想をいただきました。



証言～「生活の中に演劇を」に取り組んで～

日本劇団協議会は、「生活の中に演劇をー演劇を楽しむ未来計画ー」において、2023～2025年度の3年間にわたり、各地域の実行委員会や鑑賞会のみなさん、劇場や行政のみなさん、そして各地域へ作品鑑賞やワークショップなどの体験を届けてくれた劇団のみなさんと、緊密に協働を続けてきました。それぞれのお立場から、この事業を通して感じたこと、得ることができたと、これからの展望などについてご寄稿いただきました。

四国

地域の点と点をつなぐ

松山市民劇場 事務局長／南予で演劇を観る会 久野 はすみ

「南予で演劇を観る会」を立ち上げたのは、まだコロナの不安が大きかった2021年でした。そのため、翌年行った最初の公演は非常に苦戦しました。その後、日本劇団協議会およびキャラバン事業の支援を受け、少しずつ実績を積み上げ、小さいながらも新たな鑑賞会をスタートさせようとしています。

活動を通して気づいたのは、文化芸術に対する助成事業は単なる金銭的支援ではなく、それ以上の価値があるということです。ワークショップで笑い合うこと、演劇の感動を語り合うこと。その中で感じた劇団や劇団協議会のみなさんの「地域に演劇の感動を届けたい」という情熱が、文化的体験格差に直面している地域を励ます大きな支援となりました。

そして、地域は本来とても豊かであったということにも気づかされました。私たちは公演に関連して、南予地区に古くから伝わる「俵津文楽」を観に行ったり、明浜町出身のハンセン病詩人・塔和子さんのことを学んだりしました。活動を通して、教育・行政の現場の熱心さや、子どもたちや地元劇団のみなさんの輝く笑顔にふれました。地域に根差した企業のご厚意にも助けられました。小さな「点」だった地域の人たちの頑張りを、「演劇」がつなげてくれたのです。

地域には今もさまざまな課題が山積しています。演劇の力によって少しでも明るい未来を思い描くことができるよう、これからもご支援いただければと願っております。

種を撒く

特定非営利活動法人やわたはま銀座バスケット 代表 上田 日登美

子ども支援のNPOにある私たちが「生活の中に演劇を」事業に関わることになったきっかけは、演劇が子どもたちの自己表現や自己開示の力を確かに引き出す、という実感からでした。地方にしながら、都会と変わらぬ質の芸術を「生」で体験する。その最初の出会いを良いものにできたことは、単なる思い出づくりにとどまらず、その後につながる種を撒くことになったのではないかと感じています。

この「種を撒く」という感覚は、子どもの成長に立ち会う中で忘れてはならないものです。私たちは、子どもたちの日々、子どもたちの今に立ち会っていますが、彼らがやがて自分の力で生きていけるように未来を整える事も重要です。貴重な体験は豊かな種を撒く事に繋がります。

そしてこの事業に関わらせていただいて学んだことは、演劇との出会いは、個人の体験にとどまらず、地域の人と人をつなぐ力になっているということです。上演を共に迎え入れる準備、ワークショップ、寄付の仕組み、子どもたちとの協働。そうした関わりの中で、立場の違う人たちが一つのチームのように動く場面が、確かに生まれてきました。ただ作品を迎えるだけでなく、地域が連携する。そのプロセスそのものが、豊かな時間であり、豊かな種を撒く時間になりました。いつかそこかしこから、新たな芽吹きが生まれる事を確信し、感謝をもって春を待ちたいと思います。関わらせていただいた皆様、どうもありがとうございました。



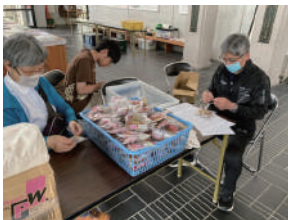
2024年度、イツフォーリーズ『おれたちは天使じゃない』公演に先がけて行われたワークショップ後の集合写真

「観るもの」から「語り合い、体験するもの」へ

香川市民劇場 事務局長 西 万葉

本事業では、公演の成果だけにとどまらず、自治体や劇場、文化芸術団体、市民団体の皆さまと力を合わせながら、西讃地域で演劇に触れる機会を広げることを目指して取り組んできました。各地で行ったワークショップには、これまで観劇の機会が少なかった方々の参加もあり、舞台芸術を「観るもの」から「語り合い、体験するもの」へと感じていただくきっかけになったように思います。

また、丸亀では丸亀市民劇場準備会を中心に人と人とのつながりが生まれ、将来の市民劇場づくりへ向けた土台となる交流が育まれつつあります。さらに、どら焼きの売り上げの一部を大島青松園へ寄付する取り組みは、演劇活動と地域の課題を結びつける小さな一歩となりました。こうした一つひとつの積み重ねが、香川における芸術体験の充実につながっていくことを願っています。



「どら寄付」のため、公演前にはスタッフがどら焼き販売の準備作業！

生活の中に演劇を ～ミュージアム発「演劇のまち新居浜」に向けて～

あかがねミュージアム運営マネージャー 菅 春二

『アカシアの雨が降る時』『あん』『表現の時間』『君はどう生きるか』・・・。

様々な世代が集い、笑う。共感、感嘆の声。演者と観客、講師と参加者が一体となった時が流れ、みんな満足そうな表情を浮かべています。演劇が人々の生活、未来を担う人材にチカラを与える。それが新居浜で、あかがねミュージアムで実証された瞬間でした。

「生活の中に演劇を」、2023年～2025年、公益社団法人日本劇団協議会様のご支援のもと、新居浜市出身の劇作家演出家・鴻上尚史さんの演出作品上演、演劇的手法を活用したワークショップ、講演会、オペラシアターこんにゃく座の公演、ワークショップが、当館『あかがね座』（「演者と鑑賞者が一体となる空間」、平土間から250席のホールまで可変可能な機能を持つホールの愛称）・市内の学校を舞台に繰り広げられました。

鴻上尚史さんを総合プロデューサーにお迎えし、地域の表現者、住民ボランティアの支えにより、当館構想段階から始めた高校生向けワークショップ、演劇指導「表現の時間」は、開館10年を迎えた記念の年、本事業により大輪の花を咲かせました。鑑賞、体験、表現活動、そしてコミュニケーション。本事業を契機に、人々が集い、演劇を通して心身ともに充実した生活、日常を過ごす拠点「あかがね座」、「演劇のまち新居浜」を目指して、あかがねミュージアムの挑戦は続きます。



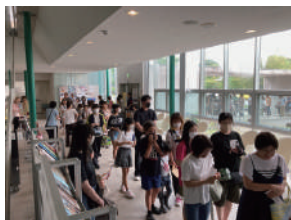
2023年にあかがねミュージアムで上演した『アカシアの雨が降る時』（左から）鈴木福、竹下景子、松村武 撮影：田中亜紀

「ルドルフとイッパイアッテナ」を観る会に参加して

高知県佐川町 岡崎 笑顔

こんにゃく座の湯本さんとの偶然の出会いが、「観る会」を作るきっかけとなりました。文化庁の支援で生のお芝居を安く観ることができる、しかし、佐川町にはそれを取り組む母体がない、ということがわかり、急遽湯本さんとの縁で、テレビ会議に参加した3人で、「観る会」を作ることになりました。かつての子ども劇場の仲間、市民劇場の会員、佐川の地元の劇団の仲間、コーラス仲間などに声をかけ、6月15日に12人で結成しました。その日から、グループラインで毎日のように情報を交流しながら、ポスター貼りやチケット売りに頑張りました。当初は目標150人が精いっぱいと思っていたのが、どんどん広がり、最終的には、観る会でチケット280枚を売りました。当日桜座に370人が入り、満席の桜座を観た時は、本当に感動しました。

こんにゃく座の素晴らしいオペレッタと、身を乗り出すようにしてみている子どもたちの姿、観終わって、「ありがとう、本当に来て良かった。」と声をかけてくださったお客様たち、すべてが感動的で、取り組んでよかったねとみんなで語り合いました。今、佐川町にある劇場「桜座」を町民が文化を享受できる場所にしたいと少しずつ取り組みを始めています。



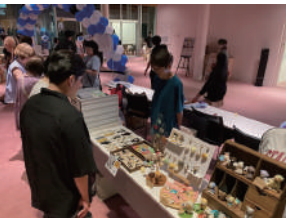
開場前、桜座に集まってくれたお客様。この後にも列は続いています!!

ルドルフとイッパイアッテナ公演について

中村こども劇場 西岡 登志

一昨年の春、しばらく公演の機会がなかった懐かしいこんにゃく座の湯本さんよりご連絡いただきました。文化庁の事業として四万十市で公演を行いたいとの事で、正直私は戸惑いました。中村こども劇場は組織は残してあるものの実質は開店休業のようなもの。何度かのやり取りの後に四万十川こども演劇祭の一環として取り組むこととなりました。周知などには四万十市教育委員会やしまんとびあの協力もあり、ずいぶんと助けられました。この街には、たくさんの文化活動があり、合唱団びあキッズの存在も心強かったです。びあキッズは、公演の終了後に一緒に歌を披露するということで、長い間練習を重ねてきました。ワークショップで劇団さんの美しい歌声に出会ってから、子ども達は舞台上上がる自分たちの姿を夢見たと思います。

当日は、夜の開催でいつも文化活動をなにかしら応援してくれている方々の出店もありました。こちらでも公演を盛り上げてくれました。地元の子育て団体が、周知にも力を貸してくれたのもかなりの影響がありました。これからの公演は、より文化が身近に感じられるように固定観念を取り払いお客様の近くに持っていく事だと思います。こんにゃく座の湯本さんとは、公演までにたくさんのやり取りをしました。私にとってもたくさんの経験となり感謝の気持ちでいっぱいです。楽しい公演をとどけて頂きありがとうございました。文化芸術がこれからも人の糧となりますように。



文化活動を応援してくれる地元商店がロビーに出店！

四国を駆け巡った、熱い4カ月間！

オペラシアターこんにゃく座 湯本 真紀

オペラシアターこんにゃく座は「生活の中に演劇を」事業として、オペラ『あん』、オペラ『ルドルフとイッパイアッテナ』をそれぞれ3地域にて、事前取組と本番をおこない、4月～7月の4カ月間、四国を縦横無尽に駆け巡りました。

各地で地域に根ざした文化活動をされている方たちと共にアイディアを出し合い、広報活動をおこなって、地道に準備を進め本番に臨みました。

公演を終えて今感じることは、「文化芸術」を地域に根付かせたいという想いを持っている人たちとどれだけ繋がっていただけるかが重要だということです。公演の準備段階に、そのことにしっかりと取り組めるかどうか、それが成功のカギを握っているとと言えます。

そして、もう一つ大事なことは、「何のために（目的）」この事業をおこなうのか、又この事業をとおして、「何を獲得していくのか（目標）」、ということを明確にし、それを協力者と共有していくことです。

「演劇」を観ることは、人の生き方や社会をいろんな視点を持って捉えなおすことができ、それまで知らなかった新しい発見をすることができます。また生の舞台は観ている人の心にダイレクトに届き、感情を揺り動かす力を持っています。

その演劇体験を世代や境遇を超えて、誰もが享受することができるのが「真に豊かな社会」ではないでしょうか。そう言った意味で、「生活の中に演劇を」事業の果たす役割は大きいと思います。

今回、この事業をとおして四国6カ所で公演できたことは、こんにゃく座にとって大きな財産となりました。人と人が繋がり、同じ志を持って取り組むところに、芝居同様のドラマが生まれ、笑いと涙と感動のフィナーレが待っていました。

反省点や改善点はありますが、それはすべて今後に生かしていくことが出来ます。

創造団体と地域や行政が手を取り合って、演劇をはじめとする文化芸術を全国に届けていくことは必要不可欠なことです。「生活の中に演劇を」事業がますます発展していくことを望んでいます。

沖縄

生活の中に演劇を！

琉球大学教職センター教授／劇団UOの会代表 上江洲 朝男

青年劇場が久しぶりに沖縄で公演すると連絡があった。届いた「星をかすめる風」の台本を読み、心が震えた。罪とか正義とかは、光の当たり方によってこうも姿を変えるのか。音楽の力、詩の言葉の力、煌めく文字。解き明かされていく真実。これはぜひ多くの人に届けたいと思った。職場でのポスター掲示やチラシ配布、プレイベントへの参加呼びかけ、チケット預かりなどの形で公演に関わった。

沖縄県内にはいくつも劇団はあるが、本格的な大劇場での演劇の公演は少ないのが現状。ほとんどの県民の生活の中に演劇はなく、観劇という行為は特別なものとなっている。そんな中、今回上演された「星をかすめる風」は、私たちにとって贅沢な経験となった。開演前の舞台。私の周りの観客から「見て、見て、奥の方で雪が降っているよ」「きれいだね」「なんか、ワクワクするね」などの期待の声が聞こえる。客電が溶暗、ライトに煌めく雪が激しさを増している。雷雪とともに舞台が始まる。

紹介した多くの人から終演後すぐに感想が届いた。「日頃の業務を忘れ、青年劇場の世界観に浸れました」「文学あり、涙あり、苦悩あり、でもユーモアと音楽もあり、今現実に戻っていますがずっと心に残ります」など、読んでいるだけでも、演劇の大きな力を感じることができた。中には「パンフレットと本も購入したのでゆっくり読みたいと思います」「詩集を買いました」という言葉もあった。演劇を観るという行為がその場限りではなく、個々人の知的好奇心を刺激し、暮らしの中により深い「思索」を生み出すのだと感じた。

「生活の中に演劇を」事業に参加して

青年劇場 白木 匡子

2024年元日におきた能登半島地震によって大きな被害を受け、開催が危ぶまれた石川県立能登高校・穴水高校での『行きたい場所をどうぞ』公演。現地の先生方から「こんな時だからこそ鑑賞の機会を設けて生徒たちを励ましたい!」との声が届き、急遽「生活の中に演劇を」事業として、6月に体育館で二校合同公演を実施することができました。生徒たちに、ひととき震災を忘れ作品を通して心をひらく時間を提供できました。

また、2024年11月には、被爆から70年後の広島を舞台にした高校生と被爆者の物語『あの夏の絵』を中学生鑑賞公演も含めて石垣島で3ステージ、2025年には韓国の国民的詩人・尹東柱が戦中に福岡刑務所で過ごした日々を描く『星をかすめる風』を沖縄本島のうるま市・浦添市で2ステージと、2年連続で沖縄での公演を実施。沖縄での本事業のテーマ「戦争証言を語り継ぎ、平和教育につなげる」に沿った演目をお届けすることができました。劇団にとって何十年振りかの沖縄での一般公演ということで、集客ができるのかという不安があったため、まずは作品を知ってもらうためのトークショーを企画。時代背景や尹東柱の詩にふれた現地の皆さんがチケット販売に協力してくださいました。またWSも行い演劇を身近に感じてもらうことができました。

石垣では「本島には東京からの舞台がくるが石垣では観られなかったので、こういった機会をもっと作ってほしい」という声を沢山いただきました。それは沖縄本島でも同じで「本格的な新劇はなかなか沖縄では見られない。久しぶりに充実した舞台を観ることができた」などの感想をいただき、演劇を心待ちにしてくださっていることが伝わってきました。普段演劇にふれる機会の少ない地域にこそ演劇を届けるという本事業、なんらかの形で是非今後も続けていくことができればと思います。



『行きたい場所をどうぞ』
(左から) 竹森琴美、原田真衣 撮影：鈴木ヨシアキ

蒔かれた種を育てる

宮古島市教育委員会 生涯学習部 生涯学習振興課 文化振興係 係長 屋嘉比 良太

宮古島市では、令和5年に「津嘉山正種ひとり語り『沖縄の魂―瀬長亀次郎物語』『命口説』公演」と「演劇を使った平和を考えるワークショップ」を、令和6年に「表現ってなんだろう?演劇ワークショップ」を、そして令和7年に「朗読劇『父と暮せば』公演、トークショー、ワークショップ」を開催していただきました。

島の中でプロの演劇を観る機会はあまり多くないため、これまで島民の中では、私を含め、「演劇を鑑賞する」という意識が低かったように思います。そのような中、毎年のように公演やワークショップを開催していただき、少しずつ演劇への認知が広がってきました。また、戦争と平和を題材にした取り組みについても、沖縄戦の際に地上戦の行われなかった宮古島では、県内の他地域と比較して取り上げる機会が少ないテーマかと思います。しかし、平和を考えるワークショップでは、参加者自身が深く平和について考えるきっかけとなりました。

そのほか、朗読劇『父と暮せば』では島内の中学生が多く鑑賞し、広島の言葉や文化で表現された芝居を通じて戦争の悲惨さについて改めて考える機会となりました。

このような機会をご提供くださいました、日本劇団協議会をはじめ、各劇団の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

これからは文化行政に携わる者の一人として、皆様に蒔いていただいた平和教育の種を育てていくとともに、島民にとって演劇がより身近にある生活を目指していきたいと思います。



たくさんの中学生在が鑑賞♪

生活に根付いたものが芸術

こまつ座 井上 麻矢

「芸術は暮らしの中にあるからこそ素晴らしい」と言ったのは、こまつ座を作った井上ひさしの言葉です。あえて更に言えば、生活に根づいていないものは文化ではないのではないとも言えます。

沖縄はもともと芸能の島です。琉球王朝時代から脈々と芸能が育まれ、沖縄独特の文化が今もしっかりとある場所です。今回、その芸能の島である沖縄での「父と暮せば」のWS、そして朗読公演をさせていただきました。「父と暮せば」は以前も沖縄の地を踏んでおりますが、時代を経て今回は朗読というこまつ座にとっても新しい試みの中で再度の公演が叶いました。

お祝いの席の最後に踊るカチャーシーに象徴されるように、沖縄で生活をしている方々は雄大な自然と伝統文化の中で、すでに表現者としての要素を確立しています。

今回のWSでは、すべての参加者が大変積極的に課題に取り組んでいただけたように思います。この作品の背景としてある「平和」への想いという点においても、原爆投下から三年後の広島という舞台の背景を深く共鳴していただくことが叶いました。

大切な人を一瞬にして失うこと、その傷をどう乗り越えていくのかは、私たちの大きく普遍的な課題です。

戦後80年を迎え、凄惨な地上戦を体験した沖縄で上演することは大変有意義なことだと痛感し、会場にいらしてくださった観客と共にその事を理解し合えたと思います。

石川

能登と無名塾が紡いだ演劇文化のあゆみ

(公財)演劇のまち振興事業団

能登の演劇文化は、仲代達矢氏が家族旅行で当時の中島町を訪れたことをきっかけに始まりました。1985年の無名塾中島合宿から、無名塾と中島町の交流が始まり1995年には仲代氏監修のもと能登演劇堂が開館しました。柿落し公演「ソルネス」から2025年の「幽霊」まで、地元七尾・中島をはじめ県内外から多くの観客が訪れ、能登演劇堂は地域文化の象徴として発展してきました。

館内の「演劇のまちあゆみコーナー」では、無名塾と中島町の交流から始まった演劇文化40年の歴史や、歴代公演の衣裳・舞台セットを展示しており、訪れる人々に能登と演劇文化の軌跡を伝えています。

2025年には節目の年を迎え、「30th40thアニバーサリートークショー」と舞台「幽霊」を記念事業として上演しました。この事業は、日本劇団協議会や無名塾、そして長年にわたり能登演劇堂を支えてきた地元住民の協力によって実現しました。トークショーで仲代氏は「能登は第二のふるさと」と述べられました。私たちもその想いをこれからも確かなものとして受けとめていきます。

令和6年能登半島地震では能登演劇堂も被害を受け、1年以上の休館を余儀なくされました。そんな中で無名塾の塾員らは震災直後から被災者の家々を回り、瓦礫の撤去や心に傷を負った住人との交流を行ってきました。これからも能登演劇堂は多くの力を借りながら、地域とともに歩み続けます。そして演劇を身近に感じられる活動や、地域住民が語り合う場としての役割を果たしていきたいと考えています。

地震に見舞われた能登の復興を願って

無名塾制作 山本 弘人

今回、能登で上演させて頂いたイブセンの『幽霊』という作品は、一般的には近代古典に属するもので、緻密な伏線の張り巡らされた構造となっています。そのぶん、少し小難しいもの、難解なものとも捉えられがちですが、人間の生き方に光をあてた作品であり、こうした近代古典は、人類にとっての大切な共有財産です。それを、敢えて被災地の能登で上演できたことは、何と言っても私たちには嬉しい限りです。上演地の七尾市の教育長が、「こんな格調高い良質の作品を、遠い能登まで持って来てくれたことに、心から感謝します」と述べられていたように、地元の人々の心情にも触れた作品だったのではないのでしょうか。

総括～（公社）日本劇団協議会より

「生活の中に演劇を」三年間の取り組みで作られたもの

公益社団法人日本劇団協議会 専務理事
福島 明夫

日本劇団協議会では正会員とともに半世紀以上かけて全国に質の高い演劇を届けてきましたが、様々な理由から演劇公演の実施が困難になっている地域もあります。特に21世紀に入ってからの子供化、地域の過疎化の進行により、各地の公演母体（演劇鑑賞会、劇場、新聞社等の主催団体、学校など）が弱体化していたところに、2020年のコロナ禍が襲いました。この事態に対してはコロナ対策事業として組まれた文化庁「アートキャラバン事業」で当法人も全国での演劇公演を実施し、各地の担い手を激励し、事業を継続する意欲を作ることが出来ました。その上に立って翌年から実施された文化庁「全国キャラバン事業」にあたっては、拠点形成を目的とするという事業趣旨に沿って、演劇公演を実施するだけでなく、演劇の魅力・有効性を発信できる事業を実施することで、演劇文化を支える担い手を増やすことを企図しました。従来演劇公演の数が相対的に少なかった四国／沖縄エリアで自治体・劇場・文化芸術団体および地域の課題解決を目的とするNPOなどの市民団体と「協働」を重視した事業展開を行い、各地に根付いた芸術文化と出会うことができました。また、能登半島地震・豪雨による被災で、演劇公演が困難になった石川県地域では、劇場との連携事業で、被災者に寄り添うことを目的としてきました。

本報告書にありますように、この取り組みの中で行われた演劇公演は多種多様な演目であるだけでなく、当法人が蓄積してきた演劇の力を発揮するワークショップや演劇の魅力を発信するための講演会・施設訪問といったアウトリーチ活動など多彩なプログラムに彩られています。その内容についてはぜひご一読いただきたいと思います。というのも、これはこの三年間に実施した地域の課題に対応するものであると同時に、全国各地の地域課題に向き合うものであると自負しているからです。そのことは各地で取り組んでくださった方々から寄せられた「種を蒔く、種を育てる」という言葉に集約されてもいます。

例えば青少年を中心とした「孤立と孤独」の課題解決にあたっては、演劇の力を生かした「居場所づくり」のワークショップが大きな力を発揮します。学校で、地域で、そこに生きる人々と語り合う場所を作り出すことは、この間の私たちの実践では、単なる方法論としてのコミュニケーションワークショップにとどまらず、お互いに生身の人間として向き合う語り合いの大切さを思い知らされています。裏返せば、日常生活の中で、他者のことを知り合う、わかりあう機会の少なさを教えてくれています。

これは「生の舞台公演」を届けることの大切さにつながるものです。目の前で生身の俳優たちが演じるその姿から得るものは、感動・ライブ感にとどまらず、作品全体を通して自分が直面している問題を客観的にみられるようになる、家族や友人と話せるようになるなど、人間や社会について考える時間につながります。それらは何よりご覧いただいた方々から寄せられた声（アンケート）の中に現れていると思います。

私たちはこの三年間の取り組みを通じて、三つのエリアで思いを共有する多くの人々と出会い、事業を共に作り出すことで、地域の相互理解をさらに深めることが出来たと確信しています。その輪をさらに広げるために、引き続き正会員50劇団の力を合わせていきたいと考えています。

生活の中に演劇を－新しい活動拠点形成事業－

助成  文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術等総合支援事業（全国キャラバン））
独立行政法人日本芸術文化振興会

2026年1月 発行

編集・発行 公益社団法人日本劇団協議会
〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-12-30 芸能花伝舎3F
TEL 03-5909-4600
email info@gekidankyo.or.jp

編集 株式会社スタッフステーション

デザイン 前村晴奈